

中國文教科書

第十卷

東京
光風館藏版

見本
中華書局
發行

3759
Y619
資料室

41734

教科書文庫

4

810

41-1931

200036

2043

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

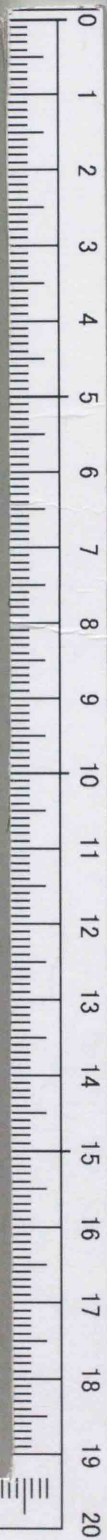


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

文部省檢定濟

昭和六年十二月二十二日 中國學校國語教科用科

375.9
Y019

吉田彌平編

中國文教科書

卷十

東京 光風館藏版

學中
國文教科書卷十

目次

一	國文學の精神	久松潜一	一
二	倭建の命	〔古事記〕	二
三	古事記を讀みて	相馬御風	三
四	寧樂の句	〔萬葉集〕	三
五	歌の調子	島木赤彦	四
六	土佐日記鈔	紀貫之	五
	出立ち		五



海の上	五
京都入り	五
七 枕草子鈔	清少納言 六〇
春は曙	六〇
にくきもの	六二
八 源氏物語	五十嵐 力 六
九 藝術の鑑賞	厨川白村 七
一〇 石彫獅子の賦	薄田泣菫 八
一一 御堂關白の幼時	〔大鏡〕 八
一二 法成寺の造營	〔榮華物語〕 九
一三 光頼卿の參内	〔平治物語〕 九

一四 世界の四聖	高山樗牛 一〇五
一五 光あれ	姉崎嘲風 一〇
一六 おのが物まなび	本居宣長 一六
一七 小品二章	二三
知足庵の記	村田春海 二三
旅泊	中島廣足 二三
一八 鼠の文づかひ	井原西鶴 二三
一九 馬追三吉	近松門左衛門 二四
二〇 西鶴と近松	佐々醒雪 二五
二一 永遠の生命	互理章三郎 二六
二二 光は日本より	高須芳次郎 二七

二三 神勅は輝く……………中村孝也 一八三

二四 勅語……………一八七

目次終

中國文教科書卷十

一 國文學の精神

久松潜一

久松潜一
國文學者
東京帝國大學助
教授
明治二十七年愛
知縣生

國文學の精神は何であるか。或は月花をめづるといふ、優美な意味に取られてゐる場合も多いであらう。しかし、よく考へて見れば、もつと生活的意味の深い種々の方面があるに相違ない。私はこゝに國文學を流れる精神として、まこと、もののははれと、幽玄といふ三つの點について考へて見ようと思ふ。

第一にまことの精神とは、あるがまゝのもの、即ち事實があるがまゝに表現する精神を中心としてゐる。これが上古の國文學

を貫く精神であると見られると思ふ。これを内容的思潮の方面から見ると、そこに強い國家的精神と個人的精神とが現れてゐる。國家的精神は古事記を中心として見られる精神で、この國家は神によつて作られ、宇宙も人類も亦神によつて作られたと見るのであつて、神を中心として生きる精神である。同じ神の中に自然神もあり、人格神もあり、人格神の中に英雄神もあり、祖先神もあり、色々であるが、何れにしても、自己より偉大なる神によつて生きる精神は、古代人の眞實なる心もちのまゝ、古事記に表現されてゐるのである。もとよりそこには想像もあり、超現實的なことも多いのであるが、後世の如く意識的に創作したものでなく、彼等に眞實なものとして映じたものがそのまゝに傳はつてゐるのである。

人麿
柿本氏
持統文武兩帝の
御代の歌聖
皇子
天武天皇の御子
草壁皇子高市皇
子など

さてまた萬葉集の中心となる精神は個人的の精神であると思ふ。人麿は國家の建設を説き、神を歌つてゐるが、その中心は皇子の薨去をいたむ哀痛の感情にある。かくて一方には自然に只管なる愛をむけるやうになり、自然の中に身を投入れて、そこに自己と自然との一つになつた境地が見られる。また一方には人生に向つて情熱的な愛をうたひ、或はこの人生の享樂すべきをうたひ、或ははかなき世であつても、現實にある間は現實をよりよく生きていかうとする、強い現實に發する愛をうたつてゐるのである。

この素樸な、まことの感情を中心とする上代人の物の見方を見つめていくと、第一に一元的綜合的である。神と人、自然と人、一つのものとしてながめる。第二に率直にして積極的である。

實朝
源氏
鎌倉三代の將軍
承久元年（七七一）
薨
年二十八

見方が單純で、迂餘曲折がない。第三に物を觀察するに多く具象的である。歌を詠むにも、目に觸れた事象を先づうたふ。對象をあるがまゝに直觀し、これを直接的に表現するのである。而してこの精神は、文化が爛熟したとき、復古的精神として常に現れて來るのである。復古的精神とは單に文字通り古に復るのではない、古代人の眞實性と素樸性との復ることがその精神である。例へば平安末期に於て、現實生活に頹廢と行きづまりとを生じたとき、實朝は萬葉集の精神に復つてその素樸性と眞實性を求めたのであると思ふ。かくて實朝の心境を見ると、一方には國家的精神が現れてゐる。

山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心我あらめ
やも

一方には人間的な愛の精神が現れてゐる。

いとほしや見るに涙もとゞまらず親もなき子の母をた
づぬる

又自然をうたふにしても、實朝の歌は萬葉時代のやうにありのまゝを見つめる、そしてありのまゝに表現するといふ態度が現れてゐる。

第二に、もののははれの精神は、ものの中に見出したあはれの精神である。あるがまゝのものの上に見出した、あるべき世界である。それは心と形との調和の中に見出される情熱の世界であるともいへる。本居宣長は、もののははれを源氏物語の基調であるとし、又平安時代文學の基調としてゐる。それは上古文

本居宣長
國學四大人の一
伊勢國松坂生
享和元年（一八一）
歿
年七十二

學の中に見える素樸な感情ではなく、それをあくまで洗煉した境地である。あるがまゝのものから、あるべきものを見出し、それを高揚せしめた境地である。高天原の岩戸の前の神樂に「あはれ、あなおもしろ、あなたのし」とある「あはれ」である。随つてそれは春の朝のほがらかな感情にも、秋の夕の寂しさの感情にも見出される。この精神が平安時代の文學のすべての上に見出される。これを歌の上に見るに、平安時代の歌は萬葉時代のやうに感情を直接的に表現するより、それを反省する所から、理智的傾向になる點がある。従つて、強烈なる感情を沈靜にし、情趣化する事にもなる。古今集の歌がそれである。そこに素樸的から技巧的な點も生ずると思ふ。平家物語は敘事詩的の物語であるが、勇壯な戦闘の間を色どつて流れてゐるものは、もの

あはれの精神である。そしてそこに華やかな、勇壯な悲壯美を形づくつてゐると思ふ。

第三に、幽玄の精神を考へて見たい。古今集の眞名序に「或、事關、神異、或興入、幽玄」とあつて、本來はもののはれとほゞ相近い意味であるが、平安末期の世相の轉變から人生の無常を觀じ來り、宗教的の考が深く入込んで、物寂しい境地を主とするやうになつた。俊成が得意な歌として、

ゆふされば野邊の秋風身にしみてうづらなくなり深草の
さと

を擧げたと傳へられる點から見ても、その邊の消息がわかるであらう。西行が自然の中に放浪する事によつてその靜寂の境

俊成

藤原氏

歌人

皇太后宮大夫

千載集の撰者

元久元年（八六四）

薨

年九十一

西行

俗名佐藤義清

歌僧

建久元年（六一〇）

寂

年七十三

地を見出して來たのも、それである。美しく咲く櫻の花かげにひそむ静けさ、寂しさを見出したのが西行であつたと思ふ。而してその幽玄は俊成のよくいふ遠白い即ち壯大といふ感情と、心が細い即ち繊細といふ情趣とを結びつけ、統一した中に見出される精神である。

而してこの精神は、一步進めて考へると、近古文學を流れる傳統的精神や、個人を否定して普遍の中に生きようとする精神と一致するものがあると思ふ。即ち文學を個性的にそのまゝ表現せず、これを傳統の型の中に入れて、そこからいふしにかけた上で表現するのである。大きな自由の精神を、型といふ窮屈な狭いものの中に入れて、それを凝縮し結晶せしめて、そこから水晶のやうな透明なものを作り出さうとするのである。これは徒然

非家
専門家ならぬ人

草に見える道といふ事によつてもわかる。愚にして慎めるは巧にしてほしいまゝなるにまさるといふのは、畢竟、道は一つの型の中に入れて精煉して始めてすぐれたものとなると考へたのである。そこに専門家を敬する心持が出て、型の文學或は道の文學を重んずる心持が生ずる。この型の中に入れる事によつて、その小さい我の否定された中から現れて來る大きな自然こゝに幽玄が現れて來ると思ふ。茶にしても、庭にしても、型の中に入つて、しかも型に捉はれない自由な境地を見出して來るのではあるまいか。それは最も小さいものの中にある最も大いなる生活である。而してこれは室町時代の藝術を代表する能樂に於てもさうである。一つの型の中に入れて、その中に普遍的な人間性をあらはさうとしてゐる。非家では到底味はふ

世阿彌
 觀世元清
 室町時代に能を
 大成した天才
 康正元年(二三五)
 歿
 年八十一
 芭蕉
 松尾氏
 徳川時代の俳聖
 伊賀國上野生
 元祿七年(三四五)
 歿
 年五十一

ことの出来ない境地である。世阿彌のいふ幽玄の精神も、やはりそこにあると思ふ。この幽玄は、近世文學に於ては、更に芭蕉の閑寂の精神ともなつてゐる。芭蕉は自然を深く凝視して、その本質をさびであると思つたのみならず、このさびに徹して、さびを生活の上に見出して來てゐる。「高く心をさとりて俗にかへるべし」といふのは、生活をさび化し、幽玄化する事であると解せられる。かくの如くにして、自然と人生との窮極であるところのさびや幽玄は、又藝術の窮極でもあつたのである。

あるがまゝのものに理念を見出した境地がまことであり、あるがまゝのものの中から、あらうとするものを見出して表現したのがもののははれてあり、更に自然と人生と藝術とを結びつけ

て、それをいぶしにかけて、統一せしめ、結晶せしめた大白光の如き境地が幽玄であらう。童のやうな素樸さから華やかな境地となり、そして、さびに達するのである。

かくの如く見るとき、まこと、もののははれと、幽玄とは一見異なつた理念のやうで、しかも本質的な相違ではなく、展開のそれぞれの過程である。まことが童心と素樸との藝術を生み出し、もののははれが心と形との融合調和した藝術を生み出し、更に幽玄がすべての大きな自然や人生を型の中に入れて、その間から結晶した白光として表はさうとする、或點からいへば象徴的な藝術を生み出したかと思ふ。而して、是等の展開流動する精神を統一したもので、そこに國文學の本質が見出されるであらう。

(上代日本文學の研究)

大帶日子淤斯呂
和氣天皇

景行天皇

纏向の日代の宮

奈良縣大和國磯

城郡纏向村がそ

の地である

その御子

小碓の命

倭比賣の命

景行天皇の御妹

二 倭建の命

大帶日子淤斯呂和氣天皇纏向の日代の宮にましくて天の下をしろしめしき。

こゝに天皇その御子の建く荒きみこゝろを惶みまして詔りたまはく、西の方に熊曾建二人あり、これまつろはず禮なき人どもなり。故、その人どもを殺れとのり給ひて遣はしき。此の時に當りて、其の御髮、御額に結はせり。こゝに小碓の命、その姨倭比賣の命の御衣、御裳を賜はり、劍を御懷に納れていでましき。故、熊曾建が家に到りて見たまへば、其の家のほとりに軍三重に圍み、室を作りてぞ居りける。こゝに新室樂せむと言ひとよみ

て、食物を設け備へたりき。かれ、そのあたりをあるきて、其のうたげする日を待ちたまひき。こゝにそのうたげの日になりて、その結はせる御髮を童女の髪のごと梳り垂れ、その姨の御衣、御裳を服して、既に童女の姿になりて、女人の中に交り立ちて、その室内に入りましき。こゝに熊曾建兄弟二人、其の童女を見めて、己が中に坐せて、盛にうたげたり。故、そのたけなはなる時に、御懷より劍を出し、熊曾が衣の衿を取りて、劍もて其の胸より刺しとほしたまふ時に、其の弟建見畏みて逃げいでき。乃ちその室の階の本に追ひ至りて、其の背をとらへ、劍もて尻より刺しとほしたまひき。

こゝに其の熊曾建まをしつらく、その刀をな動かしたまひそ。僕白すべきことありとまをす。爾暫し許しておし伏せたまふ。

穴戸の神
長門の赤間關と
豊前の門司との
間の海峡に住ん
でゐる悪神

こゝに白しつらく、汝が命は誰にますぞ。『あは纏向の日代の宮に坐しまして大八島國知しめす大帶日子淤斯呂和氣天皇の御子、御名は倭男具那王にます。おれ熊曾建二人まつろはず禮なしと聞しめして、『おれを殺れ』と詔りたまひて遣はせり。』とのりたまひき。こゝにその熊曾建、まことにしかまさむ。西の方に吾二人を除きて建く強き人なし。然るに大倭の國に吾二人にまして建き男はいましけり。こゝをもて、吾御名を獻らむ。今よりのち、倭建の御子とたゞへまをすべし。』とまをしき。このこと白しをへつれば、即ち熟菰のごと振りさきて、殺したまひき。故、その時よりぞ御名をたゞへて倭建の命とはまをしける。しかして還り上ります時に、山の神、河の神また穴戸の神を皆ことむけやはして參上りましき。

東の方十まり二道

東方十二國
伊勢(伊賀伊勢志摩)
尾張
三河
遠江
駿河
甲斐
伊豆
相模
武藏
總(安房上總下總)
常陸
陸奥

相武の國
今の相模の國
この頃は今の駿河の國の一部も相模の國の中に入つてゐたらしい

こゝに天皇また頻きて、倭建の命に、東の方十まり二道の荒ぶる神、またまつろはぬ人どもことむけやはせ。』とのりたまひて、吉備の臣等が祖、名は御鈕友耳、建日子を副へて遣はす時に、柊の八尋矛を賜ひき。故、命を受けたまはりて罷りいでます時に、伊勢の大御神の宮に參りまして、神のみかどを拜みたまひき。その姨倭比賣の命、草那藝の劍を賜ひ、また御囊を賜ひて、若し急の事あらば、この囊の口を解きたまへ。』となも詔りたまひける。故、東の國にいでまして、山河の荒ぶる神、またまつろはぬ人どもを悉にことむけやはしたまひき。故、こゝに相武の國に到りませる時に、その國の造、いつはり白さく、此の野の中に大沼あり。此の沼の中に住める神、いたくちはやぶる神なり。』とまをす。こ

燒遣

今の静岡縣駿河
國志太郡(もと
の益頭郡)焼津
町
走水
神奈川縣相模國
三浦郡浦賀町走
水

ここにその神を見そなはしにその野に入りましつれば、その國の造、その野に火をなもつてたりける。故、欺かえぬと知しめして、かの姨倭比賣の命の賜へる御囊の口を解きあけて見たまへば、その裏に火打ぞ有りける。こゝに先づ其の御刀もて草を刈りはらひ、その火打をもちて火を打出て、向火をつけて、燒き退けて還りいでまして、その國の造どもを皆斬り滅し、即ち火をつけて燒きたまひき。故、そこをば今に燒遣とぞいふ。

それより入りいでまして、走水の海を渡ります時、其の渡の神浪をたてて、船たゆたひてえ進み渡りまさず。こゝにその後、御名は弟橘比賣の命白したまはく、あれ御子に代りて海中に入りなむ。御子はまけのまつりごと遂げて、かへりごとまをし給ふべし。とまをして、海に入りまさむとする時に、菅疊八重、皮疊八重、

絶疊八重を波の上に敷きて、その上におりました。こゝにその



倭建の命
松本楓湖筆

暴波おのづからなきて、御船え進みき。かれ、その后歌はせる御歌、さねさし、相模の小野に燃ゆる火の、火中に立ちてとひしきみはも

故、七日ありて後に、その後の御櫛海邊に依りたりき。乃ちその御櫛を取りて、御墓を作りてをさめ置きき。それより入りいでまして、悉に荒ぶる蝦夷どもをことむけ、また山河の荒ぶる神どもをやはして

坂本

相模の足柄峠
命はこの峠を越
え富士山の東北
麓を経て甲斐に
出られたらしい

酒折宮

山梨縣西山梨郡
里垣村にその舊
址がある

にひばり

今の茨城縣常陸
國新治郡の邊

筑波

今の同國筑波郡
の邊

科野の國

今は信濃の國と
書く

科野の坂

美濃國惠那郡坂
本から信濃國伊
那郡河智に越え
る峠

惠那嶽

還り上ります時に、足柄の坂本に到りまして、御糧みかゑきこしめす處に、その坂の神かみ白き鹿かに化まりて來立ちき。かれ、その昨きののこりの蒜ひまの片はしもて待ち打ちたまひしかば、その目に中りて打ち殺さえたりき。故、その坂に登り立ちて、ねもごろに歎かして、あづまはやと詔りたまひき。故、その國をあづまといふなり。即ちその國より越えて、甲斐に出でて、酒折宮にましける時に歌ひたまはく、

にひばり 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

こゝに、その御火燒みかの老人おきな、御歌をつぎて歌ひけらく、

かゝなべて 夜には九夜 日には十日を

こゝをもて、其の老人を譽めて、東の國の造にぞなし給ひける。』その國より科野しなの國に越えまして、科野の坂の神をことむけて、

伊服岐の山

伊吹山
近江美濃の兩國
に跨る高山

玉倉部

今の滋賀縣近江
國坂田郡横川と
岐阜縣美濃國不
破郡今須との中
間にある長鏡
(たけくらべ)は
玉倉部の訛であ
らう

當藝野

今の岐阜縣美濃
國養老郡(もと
多藝郡養老藩の
附近)

尾張の國に還り來まして、その御刀みかたの草那藝くさなげの劍たちを美夜受みやう比賣ひめの許に置きて、伊服岐いふさぎの山の神を殺りに出でましき。こゝに詔りたまはく、この山の神は徒手むでに直ただに殺りてむ。とのりたまひて、その山にのぼります時に、山の邊に白き猪ぶ逢へり。その大きき牛の如くなりき。かれ言舉ことあして詔りたまはく、この白き猪に化れるものは、その神の使者つかひにこそあらめ。今殺らずとも、還らむ時に殺りてむ。とのりたまひて、のぼりましき。こゝに大水みづ雨あめをふらして、倭建の命をうち惑はしまつりき。故、還りまして、玉倉部の清水に到りて息ひませる時に、御心や、寤さめましき。故、その清水を居寤いごの清水とぞいふ。そこより發たたして、當藝野たがひの上に到りましし時にのりたまへるは、吾あが心恆こゝろに虚そらよりも翔とり行かむと念おもひつるを、今吾が足え歩

當藝斯
船尾の舵機

杖衝坂

今の三重縣伊勢

國三重郡内部村

大字采女の西の

はづれにある

尾津のさき

同國桑名郡多度

村古濱村の地

まず、當藝斯の形に成れり。とぞのりたまひける。故、そこを當藝といふ。そこよりや、少しいでますに、いたく疲れませるに因りて、御杖をつかして、やゝに歩みましき。故、そこを杖衝坂といふ。尾津のさきの一つ松のもとに到りませるに、先に御食せし時、そこに忘らしたりし御刀失せず、なほありき。かれ、御歌よみしたまはく、

尾張に たゞに向へる 尾津のさきなる 一つ松 吾兄
を 一つ松 人にありせば 太刀佩けましを 衣着せま
しを 一つ松 吾兄を

そこよりいでまして、三重の村に至りませる時に、また、吾が足三重の勾かぎなして、いたく疲れたり。とりのりたまひき。故、そこをば三重といふ。

三重の村

同國三重郡内部

村大字采女にそ

の名が残つてゐ

能煩野

同國鈴鹿郡川崎

村にある

そこよりいでまして、能煩野のぼに到りませる時に、國思しほばして歌ひたまはく、

大和は 國のまほろば たゝなづく 青垣山ごもれる
大和しうるはし

また、

平群
古の平群郷今の
奈良縣大和國生
駒郡明治村のあ
たり

命の またけむ人は たゝみこも 平群の山の 熊白檮くましろ
が葉を 髻華むすに挿せ その子
この御歌は思國歌しこなり。又歌ひたまはく、
はしけやし 吾家わがの方よ 雲居たち來も

こは片歌なり。
このとき、御病にはかになりぬ。こゝに御歌を
をとめの 床の邊に わが置きし 劍の太刀 その太刀

はや。

と歌ひ竟へて、即ち神あがりましぬ。かれ驛使はゆまつかひをたてまつりき。

(古事記)

相馬御風

名は昌治

文學者

明治十六年新潟

縣糸魚川町生

日本書紀

三十卷

神代より持統天

皇に至る編年史

六國史の一

舎人親玉撰

三 古事記を讀みて

相馬 御風

我々の祖先の最も力ある生活を後世の我々に示すものは、ひとり古事記並に日本書紀あるのみである。殊に古事記にあつては、徹頭徹尾、潤飾なき日本民族そのものの生活の記録である。その史實上の價値はどうであつても、とにかく我等の祖先の生活全體が、かの古事記全卷に表象化せられてゐることだけは、疑ふわけにはゆかぬ。そして我々日本民族の生活史の殆ど全部を包んでゐるといつてもいゝほどな、かの佛・儒二教の空氣の全

然混じてゐない我が民族の記録は、たゞこれあるのみである。

此の點に於て、我が民族にとつて最も尊い、そして最も廣く最も深く讀まれ味はるべき書物は古事記である。古事記は實に我等日本民族の生活の源であると思ふ。

古事記を讀んで我々の感ずるところのものは、たゞ偏に生きんとする人間の力である、あらゆるものを自己の生活に統一しようとする努力である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀なかつた。彼等は人間を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生活の一部で、彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等は、その身に纏ふべき衣服の材料を彼等に供給する蠶も、彼等の生命を繋ぐべき稻も、粟も、小豆も、麥も、大豆も、皆彼等の肉體から分化して出たものと觀た。それほどまでに

彼等は人間の生活を擴大してゐた。彼等の眼中には、人間の運命の最後は死でなくして、發展極りなき生であつた。死の國にある伊邪那美命が、汝の國の人草、一日に千頭絞り殺さな。といはれたのに對して、生の國にある伊邪那岐命は、汝さし給はば、吾はや一日に千五百産屋立ててむ。と答へられた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐる。殊に古事記全卷を通じて、熱烈な生の力が飽くまでも死の力と戦つて、それに打勝たう、それを脱けださうと悶えてゐる事實が、到るところに書かれてゐることは、最も注目すべきことである。後世の日本人に見るが如き、死に對してひたすら悲しむやうな態度は、少しも見えない。死に對して悲しみ、歎きは、はてはあきらめるやうなことは、我等の祖先にはなかつた。彼等の死に對して悲しみ歎く感情は、常に一轉し

筆蹟 故於_レ是_二天照大御神見_レ畏_レ開_二天石屋戸_一而刺許母理_レ此三字以_レ音_レ坐也
爾_二高天原皆暗葦原中國悉闇_一此而常夜往_レ於是萬神之聲者狹蠅那須_レ此二字以_レ音_レ滿萬妖悉_レ發是以八百萬神於_二天安之河原_一神集_レ而_レ訓_レ集_二都度比_一
高御産巢日神之_レ子思_レ金_レ神_レ令_レ思_レ訓_レ金_レ云_レ加_レ尼_レ而集_レ常世長鳴鳥_レ令_レ

て死に對する憎惡の念となり、挑戦の力となつた。彼等は死といふ事實に對してあきらめる代りに戦つた。彼等はいかなる境遇にあつても常に生

故於_レ是_二天照大御神見_レ畏_レ開_二天石屋戸_一而刺許母理_レ此三字以_レ音_レ坐也
爾_二高天原皆暗葦原中國悉闇_一此而常夜往_レ於是萬神之聲者狹蠅那須_レ此二字以_レ音_レ滿萬妖悉_レ發是以八百萬神於_二天安之河原_一神集_レ而_レ訓_レ集_二都度比_一
高御産巢日神之_レ子思_レ金_レ神_レ令_レ思_レ訓_レ金_レ云_レ加_レ尼_レ而集_レ常世長鳴鳥_レ令_レ

古 春 欲 生
本 欲 生
記 本 欲 生
等 之 生 之 欲

求は、死をも生に變へなければ止まなかつた。次に我等祖先の神は人間の生活力の象徴である。實際我々の祖先くらゐ、なんでも神といふ尊稱をつけた民族は他にない。

さうかといつて、他の未開の民族に見るやうな多神的でもなく、また野蠻な自然物崇拜でもなかつた。神はすべて人間であつた。威力を有する人間は即ち神であつた。随つて、謂はゆる敬神の念には、救済を祈るやうな分子はなかつた。敬神はたゞ肉身の源、生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絶対的の主權者とは思はなかつた。敬神は絶大な人格に對する讚美と自己の生命の源に對する讚美とに外ならぬのであつた。祈念はまた常に幸福本位であつた。我を捨てて神にすぎるといふよりは、我の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならぬのであつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大せられた象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふところに強固な基礎を有す

る我等の祖先の敬神觀念は、他面に於てその念力に逆らふところのものの衰滅を信じた。

偏に生活の發展と擴大とを意志とした我等の祖先の生活は、随つてまた非常に努力的なものであつた。境遇に屈することを知らぬその生活は、常に意志そのものの悲劇であつた。我が國の文藝的産物で、悲痛な生活意志の發現を見得るものは、古事記を措いて他にないといつてよいからである。この點に於て最高な意味の悲劇的人格は、我が國の歴史中、古事記以外には求め得られないと思ふ。

古事記中に書かれた數多ある悲劇的人物の中で、最も我々の心を惹くのは日本武尊である。尊はいかなる難事をもし遂げて自分の力を發展させようとした。自分の事業の爲に、最愛の後

弟橘姫が眼前で犠牲となられるのも敢へて忍ばれた。しかしそれでもながら、尊はなほその妻を慕うて、「阿豆麻波夜」の歎聲を禁じ得なかつた。

かくて、尊はあらゆる困難と戦ひ、あらゆる危険を冒して東北地方平定の大任を一步々々に果した。自己の苦しい境遇を知りながらも、なほ自己の努力を惜まなかつた。しかし、その運命は遂に不幸なものであつた。いかなる強敵に對しても挫けなかつた尊も、病氣には敵し得なかつた。東北討伐の大業を果して都へ歸る途上、尊は終に伊勢で此の世を去られた。「吾が心恆に虚よりも翔り行かむと念ひつるを、今吾が足え歩まず、當藝斯の形に成れり。」といふ尊の歎聲には、實に悲壯な響が籠つてゐる。歩一步に疲れて衰へゆく病軀をよろめき運びながら、尊は絶え

ず故郷なる大和の國を戀ふる歌をうたはれた。歌ひながら終に斃れられた。就中、

命の またけむ人は たゞみこも 平群の山の 熊白禱
が葉を 警華にさせ その子

といふ歌の如きは、最もよく尊の生を愛せられる心の熱烈であつたことを示してゐる。身は逆境にあつて、旅に斃れようとしながらも、なほかつ「命の全からん故郷人よ、汝等の命の全からんかぎりには、熊白禱の葉を頭に飾つて、楽しく面白く遊べ。」と歌ふ。これを後世の死を悲しみ、運命を恨む數多の人々の歌とくらべて見ると、當時の人々の生活に對する心持の如何に積極的であつたかに驚かれるではないか。更に驚かれることは、日本武尊が薨去の後、大きな白鳥と化して、所定めず、行方知れず、天翔り行

き給うたことである。御子たちが哭き叫びながら慕ひ追ふをも顧みられないで、かの大きな白鳥は、野より海へ、海より山へ、山より海へと、天翔り天翔つて、最後はその行方が知れなくなつた。白鳥の止る處に造られた幾つかの御墓は、遂に日本武尊の最後の住家ではなかつた。御墓はすべて空虚な外形のみで、日本武尊その人の生命は、遂に止る所を知らなかつた。發展極りなき日本武尊の生命は、結局、墓を脱れ、生ける白鳥となつて天翔り行く生命であつた。

この日本武尊の生涯のやうに、雄々しい努力に充ちた生活は、我が國の歴史に於ては、殆ど他に求められない。日本武尊の生涯は一刻も休みなき努力の生涯であつた。

いかなる境遇にあつても、尊の強烈な生活力は常に外に向つて

發展した。此の偉大な生活の發展力の向ふところ、尊はいかなる敵とも戦ひ、いかなる敵をも斃さねば止まなかつた。尊は自ら知れる逆境裡にあつて、死に瀕しながらも、なほ聲をあげて生を讚美する歌をうたつた。尊は死してもなほ墓の暗闇を脱れて、天翔り天翔つた。かくの如く最後までも熱烈な生の力の充ち満ちた生涯は、我が國の文藝的產物中、古事記を措いて他のどこに見出し得られようか。尊を通じて感ぜられる我等の祖先の生活そのものに對する心持が、いかにも我々には慕はしいのである。人間の生活意志そのものの悲痛な發展は、我が國の藝術的產物中、ひとり古事記に於てのみ見られると思ふ。外に向つて最近著しい國家的發展をなし來つた我が日本民族は、內的方面にもまた最近著しい革新の行程を辿りつゝある。

無論それは外國思想の影響が多分にあるのだが、しかし、大體からは從來の消極的思想に對する新たな積極的思想の勃興と見て差支なからう。長い年月の間續いて來た我々民族の消極的生活に對する新しい生活慾の勃興、その生活全體の革新の過渡期、それが現今の我が文藝界を中心とした思潮の情態ではなからうか。かう考へて見て、更にかの古事記時代に於ける我々祖先の積極的生活の空氣を味はつて見ると、我々には一種堪へがたい憧憬の念が湧くのを覺える。(黎明期の文學)

四 寧樂の句

近江の荒都を過ぐる時よめる歌 柿本人麿

玉櫛 畝傍の山の 樞原の ひじりの御代ゆ 生れま

近江の荒都
天智天皇の都さ
れた近江の天津
宮の舊址
滋賀縣近江國滋
賀郡滋賀村南滋
賀崇福寺の址が
當時内裏のあつ
た邊だといふ
大津市の北四料

奈良山
奈良市の西北に
ある山
歌姫越

辛崎
滋賀の都の東北
琵琶湖に臨んだ
ところ

しし 神のことく 櫻つばきの木の いやつぎくくに 天
の下 知ろしめししを 天あまにみつ 大和をおきて あ
をによし 奈良山をこえ いかさまに 思ほしめせか
天さかる 鄙にはあれど いはばしの 近江の國の
さゝなみの 大津の宮に 天の下 知ろしめしけむ
すめろぎの 神のみことの 大宮は こゝと聞けども
大殿は こゝと言へども 春草の 茂く生ひたる 霞
立つ 春日の霧きりれる もゝしきの 大宮處 見ればか
なしも

反歌

さゝなみの滋賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちか
ねつ

山部赤人
聖武天皇頃の歌人

さゝなみの滋賀のおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢
はめやも

富士山を望みて

山部赤人

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河な
る 富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日
の 影もかくろひ 照る月の 光も見えず 白雲も
い行きはゞかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ
言継ぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士のたかねに雪
は降りける。

山上憶良
文武天皇より聖
武天皇頃までの

歌人
筑前守
天平五年(三二三)
卒
年七十四
等しく衆生を
思ふ
吾觀ニ衆生ニ無クト
偏黨ニ如クニ羅怛
羅。(最勝王經)
羅睺羅
釋迦の子
Rahula
十大弟子の一
人
族を喩す歌
出雲守大伴古慈
悲が淡海三船の
讒言によつて免
官された時家持
が大伴氏の一
族に喩した歌
大伴家持
聖武天皇より桓
武天皇頃までの
歌人
延暦四年(一四五)
卒

子等を思ふ歌

山上憶良

釋迦如來金口正しく説きたまふ、等しく衆生を思ふこ
と羅睺羅の如し」と。又説きたまふ、愛は子に過ぎたる
は無し」と。至極の大聖すら尙子を愛する心あり。況
や世界の蒼生、誰か子を愛せざらむや。
うりはめば こども思ほゆ 栗はめば ましてしぬば
ゆ いづくより 來たりしものぞ まなかひに もと
なかりて やすいしなさぬ

反歌

銀も金も玉もなにせむにまされる寶子にしかめやも

族を喩す歌

大伴家持

ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし
 皇祖の 神の御代より 櫛弓を 手握り持たし 眞鹿
 兒矢を 手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先
 に立て 鞆取りおほせ 山川を 岩根さくみて 履み
 とほり 國覓ぎしつゝ ちはやぶる 神をことむけ
 まつろはぬ 人をもやはし 掃き浄め 仕へ奉りて
 秋津洲 大和の國の 櫃原の 畝傍の宮に 宮柱 太
 知り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖の 天の
 日繼と 繼ぎて来る 君の御代々々 隠さはぬ 明き
 心を 皇方に 極めつくして 仕へ来る 祖の司と
 言立てて 授け給へる 生みの子の いやつぎくゝに
 見る人の 語りつぎでて 聞く人の 鑑にせむを あ

たらしき 清きその名ぞ おほろかに 心思ひて 虚
 言も 祖の名斷つな 大伴の 氏と名に負へる ます
 らをの伴

反歌

劍太刀いよゝとぐべしいにしへゆさやけく負ひて來
 にしその名ぞ

志貴皇子

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりける
 かな

輕皇子安騎野に宿し給ふ時よめる歌

柿本人麿

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば

志貴皇子

天智天皇の皇子

歌人

靈龜二年(三七〇)

薨

輕皇子

天武天皇の御孫

草壁皇子の御子

安騎野

奈良縣大和國宇

陀郡の西部の野

月かたぶきぬ

有間皇子自傷結松枝歌二首

家有者筍爾盛飯乎草枕旅爾之有者推之葉

余感

つるあれもくもつるいひをくもくもく
くもくあれもくもくいひをくもくもく

萬葉集
元暦校本

筆蹟

有間皇子自傷
結松枝歌二首
家有者筍爾盛飯
乎草枕旅爾之有
者推之葉爾盛
いへにあればけ
にもるいひをく
さまくらたびに
しあればしひの
はにもる

高石黒人

文武天皇頃の歌
人

安禮の崎

静岡縣遠江國濱
名郡新居の崎の
舊名

高市黒人

いづくにか舟はてすらむ安禮の崎漕ぎたみ行きし棚無し小舟
大唐に在る時本郷を憶ひてよめる歌

大伴
今の大阪市の海
岸あたり

楸
ひさかきともい
ふ

楊桐科の常緑樹
芳野離宮

奈良縣大和國吉
野郡中莊村宮瀧
にあつたといふ

勅
聖武天皇の
象の小川

奈良縣大和國吉
野郡中莊村宮瀧
にある小川
象山から出て吉
野川に入る

山上憶良

いざ子どもはやく日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ
病に沈める時の歌

をのこやも空しかるべき萬代に語りつぐべき名は立てずして

山部赤人

ぬばたまの夜の更けぬれば楸生ふる清き河原に千鳥しば啼く
暮春の月芳野離宮に幸せる時勅を奉りて

大伴旅人

むかし見し象の小川を今見ればいよ、清けくなりにつけ

布勢の水海

富山縣越中國水見郡水見町にある十二町瀉今は干拓されて小さくなつた

多祢灣

氷見町の南四軒田子

もとは布勢の水海がこゝまでつづいてゐた

天平五年

聖武天皇の御代 (三三六)

るかも

布勢の水海に遊覽し船を多祢灣に泊めて

藤の花を望み見て 大伴家持

藤浪の影なる海の底清みしづく石をも玉とぞ吾が見る

興に依りて詠める歌

わが宿のいさゝ群竹吹く風之音のかそけきこの夕かも

天平五年遣唐使の船難波を發ちて海に入

る時母の子に贈れる歌 讀人不知

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子はぐくめ天の鶴群

防人の歌 丈部造人麿

大君のみことかしこみ磯にふりうのばらわたる父母を

おきて

聖武天皇

第四十五代

天平勝寶八年(

三〇八)

壽五十八

元興寺

もと蘇我馬子が大和國高市郡飛鳥に立てた寺で法興寺ともいふ今の飛鳥大佛の地

奈良朝時代に奈良の左京に移り

新元興寺といふ

この歌は天平十

年(三三〇)の詠

島木赤彦

本名久保田俊彦

歌人

教育者

明治九年長野縣

上諏訪町生

大正十五年歿

年五十一

今奉部與曾布

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出て立つ

われは

酒を節度使卿等に賜ふときの御歌

聖武天皇

大丈夫の行くといふ道ぞおほろかに思ひて行くな大丈夫

夫の伴

自ら嘆く歌 元興寺の僧

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知

れらば知らずともよし (萬葉集)

五 歌の調子

島木赤彦

短歌に於ける表現は、單に歌の言葉の持つ意味のみで足れりとすることは出来ません。その表現しようとする感動の調子が、歌の各の言葉の響や、それらの響をつらねた全體の節奏の上に現れて、始めて歌の生命が生れるのであります。歌の言葉の響、節奏、これを歌の調子若しくは聲調、格調等と謂ひます。

我々の感動は、伸びくくと働く場合、ゆるくと働く場合、切迫して働く場合、沈潜して働く場合といふやうに、箇々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、さながらに歌の言葉の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒軽するところがないほど、短歌表現上の重要な要求になるのであります。古來の秀作は、皆歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるた

柿本人麿歌集
萬葉集に引用せられた歌集
滅びて傳はらな
い
弓月が嶽
奈良縣大和國磯
城郡纏向村にあ
る山
三輪山の近く

めに、永久の生命を持つてゐるのであります。例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわたる
（萬葉集卷七）

の歌について言ひましても、山川の瀬の鳴るなべに」と一氣に進んで第四句を呼び起すところに、多く生動の趣があるのであります。そして、この「なべに」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二箇の濁音と相俟つて山川の景情を生動させてゐる勢は、これを他の如何なる句法を以てしても言換へることの出来ないものであります。これは勿論「なべに」の持つ意味より来る力もあるものであります。響から来る力と、その響の全體の節奏に及す影響とが大きいのであります。殊に、第一二句「亘爾波」の疊用を受

けて、鳴るなべに」と押進んでゆく勢を想ふべきであります。第四五句は、これに對して更に非常の力を以て据つてゐるのであります。金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も主として調子の上に現れてくるのであります。第五句二五音が、主として力の中心となつて居ります。試みに、第五句を「雲ぞ立つなる」「白雲立つも」などの三四音、四三音としたら、どうでありませう。歌の力がめちや／＼に碎けてしまふでありませう。歌の生命が内容や材料よりは、調子にあることが分ります。この歌は、實に、山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が徹底して歌の調子に現れてゐるのであります。かやうな歌によつて歌の調子を會得することは、ためになることであります。

● み吉野の象山みやまのまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲

かも (萬葉集卷六)

これは山部赤人の歌であります。「山のま」は「山の際」、木ぬれは「木の末」、こゝだは「許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀬の」の歌によく似てゐるのみならず、み吉野の象山のまの「と豆爾波」のを疊用して初句を起してゐる手法までも、よく似て居るのであります。第三句以下にいたつて、全く前者と異なる感動をあらはして居ります。これは前の人麿の歌の、第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、み吉野の象山のまの木ぬれには」と呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押進めてゐるからであります。こゝだもさわぐ鳥の聲かも」

といふ四三音、三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」といふ七音、二五音の諧調と、自ら別趣の勢をなして居ります。人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つて居ります。赤人のこの歌は、赤人の沈潜した静肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つて居ります。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は、個性の異なるがまゝにちがつてゐるのであります。それが自然に歌の調子に現れるのであります。人麿の歌は、數歩を過れば騒がしくなりませう。赤人の歌は、數歩を過れば平板になりませう。これは皆兩者の歌の調子から來てゐる相違でありまして、調子の相違は兩者性格の相違から來てゐること勿論であります。猶この赤人の歌で、上句を受ける第四五句に重々しい響を持つた詞の多い

天の香具山
大和三山の一
奈良縣大和國十
市郡香久山村に
ある

といふことが、讀者の感動を異常な所へ誘つて行く力になつてゐることに注意すべきであらうと思ひます。

春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり天の香具

山 (萬葉集卷一)

持統天皇の御製として知られて居ります。第二句と第四句で切れてゐるために、調子が落着いて、初夏の心持が現れて居ります。第五句の名詞止めも、この場合よくすわつて、動かさない重みを持つて居ります。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句で定まります。第五句だけでは無論定まりませんが、少なくとも第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやうであります。これは、前に擧げた例について見ても分ります。萬葉集には、字餘りの句が多いのでありますが、それは、大抵第五

夏實の川

吉野川の上流
いま宮瀧の上手
に茶摘村がある

湯原王

天智天皇の皇孫
志貴皇子の御子
光仁天皇の皇弟

句にあるやうであります。それも第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

(萬葉集卷三)

湯原王の御歌であります。第一句からすらくと連続した句法を第四句で一旦踏切つてゐるために、緊りと勢とが生じ、さらに「山かげにして」といふ生動の句を据ゑて、この句が一首全體に反響するほどの力になつて居ります。感嘆に値する作でありませう。

以上の例は、皆萬葉集から挙げました。今一つ、源實朝の歌を挙げます。

大海の磯もとゞろに寄する波割れて碎けて裂けて散る

かも (金槐集)

波の鞆と寄せかへす景情に對して、割れてといひ、碎けてと重ね、裂けてと疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本には、第三句が「よる波の」とありますが、これは、必ず「よする波」と一旦踏切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、それを現した歌の姿とが、如何によく一致して居るかを知らることが出來ませう。

以上諸例によつて、少しく歌の調子を説きましたが、心の相が人によつて異なるばかりでなく、一人の心も様々に動きますから、その動きの状が如何にして歌の調子に現れるかといふことは、到底説き盡せる筈がありません。只それが如何なる心の動きであらうとも、調子の上に緊張して現れて居らねばならぬこ

とは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔きものは柔きに緊張して居り、強きものは強きに緊張して居り、暢やかなるは暢やかなるに緊張して居らねばなりません。而してその緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集であります。左様な歌の調子を我々は萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主觀から生れることは贅言に及びません。(歌道小見)

紀貫之

平安朝の歌人
古今集の撰者
天慶九年(八六〇)
卒
年六十五

その年
朱雀天皇の承平
四年(五九四)

六 土佐日記鈔

紀貫之

出立ち

男もすといふ日記といふものを、女もして見むとてするなり。その年の十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に門出す。その由いさゝか物に書きつく。

解由
在任中の會計に
相違ないことの
證明書
住む館
國守の館
土佐の國府は長
岡郡にあつた

或人縣の四年五年果てて、例の事ども皆しをへて、解由ゆなど取りて、住む館より出でて、船に乗るべき處へわたる。これかれ知る知らぬ送りす。年頃よく具しつる人々なむ別れ難く思ひて、しきりにとかくしつゝのゝしるうちに夜更けぬ。二十二日、和泉國まで平かにと願ひ立つ。藤原言實とよざね船路なれど、うまのはなむけす。上中下酔ひすぎていとあやしく、潮海のほとりにてあざれあへり。二十三日、八木康教といふ人あり。この人、國に必ずしもあてつかふものにもあらず。これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる。守がらにやあらむ、國人の常として今はとて見えざるを、心あるものは恥ぢずなむ來ける。これは物によりてほむるにしもあらず。

二十四日、講師馬のはなむけしに出でませり。ありとある上下童まで酔ひしれて、一文字をだに知らぬものしが、足は十文字にふみてぞ遊ぶ。

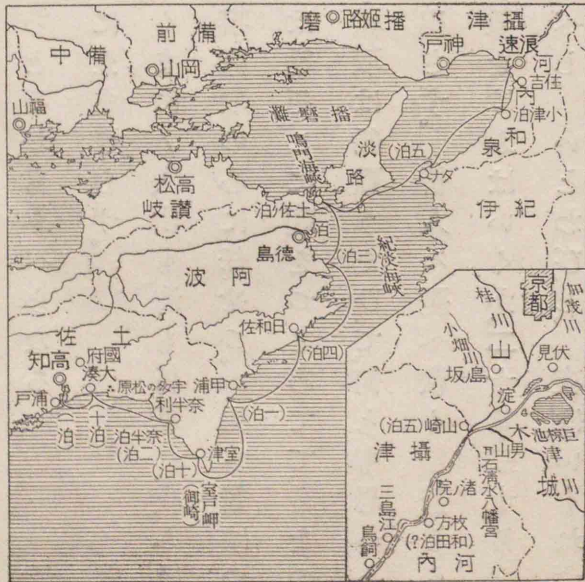
海の上

九日のつとめて、大湊より那波のとまりを追はむとて漕出でけり。これかれたがひに國のさかひのうちはとて、見送に來る人あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政等なむ、御館より出で給ひし日より、こゝかしこに追ひくる。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今は漕ぎはなれてゆく。これを見送らむとてぞ、この人どもは追來ける。かくて漕ぎゆくまに、海のほとりに留れる人も遠くなりぬ、船の人も見えず

九日 朱雀天皇の承平五年正月九日
大湊 高知縣長岡郡にあつた
那波 高知縣安藝郡奈半利川の川口

宇多 高知縣香美郡岸本村宇田

なりぬ。岸にも言ふことあるべし、舟にも思ふことあれど、かひなし。かゝれば、此の歌どもをひとりごとにしてやみぬ。
おもひやる心は海をわたれどもふみしなれば知らずやあるらむ
かくて宇多の松原をゆき過ぐ。其の松の數、いくそばく、幾千年経たりと知らず。もごとくに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびかふ。おもしろしと見るに堪へずして、舟人のよ



路船のへ京りよ佐土

めるうた、

見わたせば松のうれごとにしむつるは

千代のどちとぞおもふべらなる

とや。此の歌は處を見るにえまさらず。

かくあるを見つゝ漕ぎゆくまに、山も海も皆暮れ、夜ふけて西東も見えずして、天氣（け）の事（ひ）穢取の心に任せつ。男も習はぬはいとも心細し。まして女は船ぞこに頭をつきあてて、音をのみぞ泣く。かく思へば、舟子、穢取は船歌うたひて、何とも思へらず。二十日、昨日の様なれば船出さず。皆人々憂へ歎く。苦しう心許なければ、只、日の経ぬる數を、けふはいくか、二十日、三十日と數ふれば、およびも損はれぬべし。いとわびし。夜はいもねず。二十日の月出でにけり。山のはもなくて、海の中よりぞ出でく

安倍の仲麿

靈龜二年（三七〇）
唐に留學し後唐
朝に仕へ寶龜二
年（四三三）彼の地
に歿した
年七十一

男文字
漢字

る。かうやうなるを見て、昔、安倍の仲麿といひける人は、唐土に渡りて歸り來ける時に、舟に乗るべき處にて、かの國の人、馬のなむけし、わかれを惜みて、かしこのからうた作りなどしける。あかずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は海よりぞ出でける。それを見て、仲麿のぬし、我が國にはかゝる歌をなむ、神代より神もよみたび、今は上・中・下の人も、かうにわかれ惜み、喜もあり、悲みもある時には詠む。とて、よめりける歌、

あをうなばらふりさけ見れば春日なる

みかさのやまに出でし月かも

とぞよめりける。かの國の人、聞きしるまじうおぼえけれど、この心を、男文字に、さまを書きいだして、こゝの言葉傳へたる人

に言ひ知らせければ、心をや聴き得たりけむ、いと思の外になむ
愛でける。唐土とこの國とは言異なるものなれど、月の影は同
じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。さて今そ
のかみを思ひやりて、或人のよめる歌、

都にて山のはに見し月なれど

波より出でて波にこそいれ

十六日

承平五年二月

山崎

今の京都府山城

國乙訓郡大山崎

村

島坂

同郡向日町の西

の長岡の上にあ

る

都入り

十六日、今日の夕つ方、京へのぼる序に見れば、山崎の店なる小櫃
の繪も、饅餅（まが）の法螺の形もかはらざりけり。「賣る人の心をぞ知
らぬ」とぞいふなる。かくて京へ行くに、島坂にて、人あるじした
り。必ずしもあるまじきわざなり。立ちて行きし時よりは、歸

桂川

大堰川の下流

末は淀川に入る

飛鳥川

世の中は何か常

なる飛鳥川昨日

の淵ぞ今日は瀬

になる（古今集

読人不知）

る時ぞ人はとかくありける。これにもかへりごとす。

夜になして京には入らむと思へば、急ぎしもせぬ程に、月出でぬ。

桂川月の明きにぞわたる。人々のいはく、この川飛鳥川にあら

ねば、淵瀬さらに變らざりけり」といひて、ある人のよめる歌、

ひさかたの月に生ひたる桂川

そこなる影もかはらざりけり

又或人のいへる、

天雲のはるかなりつるかつら川

そでをひでても渡りぬるかな

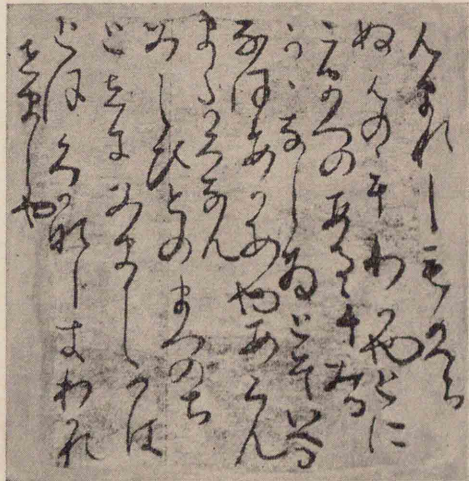
又或人よめる、

かつら川わが心にも通はねど

おなじ深さにながるべらなり。

筆蹟

うまれしもかへ
らぬものをわか
やとにこまつの
あるをみるかか
なし散とそいへ
るなほあかすや
あらんまたかく
なん
みしひとのまつ
のちとせにみま
しかはとほくか
なしきわかれせ
ましや



藤原 佐定 日記家筆

京のうれしきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜更けて、處々も
見えず。京に入立ちてうれし。家にいたりて門に入るに、月明
ければ、いとよく有様見ゆ。聞きしよりもまして、いふかひなく
ぞこぼれ破れたる。家を預
けたりつる人の心も荒れた
るなりけり。中垣こそあれ、
一つ家のやうなれば、望みて
預れるなり。さるは、便ごと
に物も絶えず得させたり。
今宵かゝる事と、聲高にも
も言はせず、いとほつらく見ゆれど、志はせむとす。さて池めい
てくぼまり、水づける處あり。ほとりに松もありき。五年六年

のうち、千年や過ぎにけむ、片枝はなくなりけり。今生ひた
るぞまじれる。大方皆荒れにたれば、あはれとぞ人々いふ。思
ひ出でぬ事なく思ひ戀しきがうちに、この家にて生れし女子の、
もろともに歸らねば、いかゞは悲しき。舟人も皆子抱きての、
しる。かゝるうちに、猶悲みに堪へずして、密かに心知れる人と
いへりける歌、

うまれしもかへらぬものを我が宿に

小松のあるを見るが悲しさ

とぞいへる。あかずやあらむ、またかくなむ。

見し人を松のちとせに見ましかば

遠くかなしきわかれせましや

忘れがたく、くちをしき事多かれど、えつくさず。とまれかうま

れ、とくやりてむ。(土佐日記)

清少納言

平安朝の文學者

枕草子の著者

肥後守清原元輔

の女

一條天皇の皇后

藤原定子に仕へ

た

七 枕草子鈔

清少納言

春は曙

春は曙。やうく白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ、螢飛びちがひたる。雨などのふるさへをかし。秋は夕暮。夕日花やかにさして、山のはいと近くなりたるに、鳥のねどころへゆくとして、三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などの列ねたるが、いと小さく見ゆる、いとをかし。日入りはてて、風の音、蟲のねなど、いとあはれなり。冬はつとめて雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜などのいと白く、又さ

炭櫃
圍爐裏
火桶
圓火鉢の類

らでもいと寒きに、火などいそぎおこして炭もて渡るも、いとつきづきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭櫃、火桶の火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

にくきもの

いそぐ事ある折に、長言するまらうど。あなづらはしき人ならば、後になどいひても追ひやりつべけれども、さすがに心はづかしき人、いとにくし。硯に髪の入りにて磨られたる。又墨の中に、石こもりて、きしくときしみたる。俄かにわづらふ人のあるに、験者求むるに、例ある處にはあらで、他にある尋ねありくほどに、待遠に久しきを、辛うじて待ちつけて喜びながら加持せざるに、この頃物のけに困じにけるにや、居るまゝにすなはちねぶ

加持

病氣災難等を攘ふ爲に佛力の加護を祈る咒法

り聲になりたる、いとにくし。なんてふことなき人の、すゞろに
えがちに物いたういひたる。火桶炭櫃などに手の裏打返し、皺
押延べなどしてあぶり居る者。いつかは若やかなる人などの、



狩衣

さしたりし。老いばみ、
うたてあるものこそ、火桶
のはたに足をさへもたげ
て、物言ふまゝにおしすり
などもすらめ。さやうの
者は、人のもとに來て、居む
とする處を、まづ扇して塵拂ひすてて、居も定まらずひろめきて、
狩衣の前、下様にまくり入れても居るか。かゝる事は、いひが
ひなき者のきはにやと思へど、少しよろしき者の、式部の大夫、駿

ひろめき
廣めきか
狩衣
もとは狩獵の時
の布衣
當時は六位以上
の常服で絹製
式部の大夫
五位の式部大丞

駿河の前司
前駿河守

伊豫簾
伊豫國浮穴郡か
ら出る細い簾で
編んだすだれ
帽額の簾
上部に水引のあ
る縁取の精製の
簾

河の前司などいひしが、させしなり。また酒飲みてあめき、口を
さぐり、髯あるものはそれを撫でて、盃人に取りするほどのけし
き、いみじくにくしと見ゆ。「また飲め」などいふなるべし。身ぶ
るひをし、頭振り、口わきをさへ引垂れて、童べの、國府殿こくふどのに参りて、
など謠ふやうにする。それはしも、まことによき人の、さし給ひ
しより、心づきなしと思ふなり。

物羨みし、身の上嘆き、人の上言ひ、露ばかりの事もゆかしがり、聞
かまほしがりて、言ひ知らせぬをば怨じ譏り、又、わづかに聞きわ
たる事をば、われもとより知りたる事のやうに、他人ひとにも語りし
らべいふも、いとにくし。物聞かむと思ふほどに泣くちご。烏
の集りて飛びちがひ鳴きたる。伊豫簾など懸けたるをうちか
づきて、さらくと鳴らしたるもいとにくし。帽額かぶかちの簾は、まし

遣戸
横にあける引戸

てこはき物の打置かるゝいとしるし。それも、やをら引上げて
出で入りするは、更に鳴らず。また遣戸など荒くあくるもいと
にくし。少し擡ぐるやうにてあくるは、鳴りやはする。悪しう
あくれば、障子などもたをめかし、こほめくこそしるけれ。ねぶ
たしと思ひて臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛び
ありく。羽風さへ身のほどにあるこそ、いとにくけれ。きしめ
く車に乗りてありく者、耳も聞かぬにやあらむと、いとにくし。
わが乗りたるは、その車の主さへにくし。
物語などするに、差出でて、我一人才まくる者。すべて差出では、
童も大人も、いとにくし。昔物語などするに、わが知りたりける
は、ふと出でて言腐いひくたしなどする、いとにくし。鼠の走り歩く、いと
にくし。あからさまに來たる兒こどもども童べをらうたがりて、をか

誦文する
咒文を唱へるこ
と
クサメは即ちそ
の咒文の一

しき物など取らするに、習ひて、常に來て居入りて、調度や打散ら
しぬる、にくし。家にて、宮仕所にても、逢はでありなむと思ふ
人の來たるに、空寐をしたるを、我がもとにある者どもの、起し寄
り來ては、いぎたなしと思ひ顔に引搖がしたる、いとにくし。今
參りのさし越えて物知顔に教へやうなる事いひ、後見たる、いと
にくし。鼻ひて誦文する人。大方家の男おとこ主しゅならでは、高く鼻ひ
たる者、いとにくし。蚤もいとにくし。衣のしたに躍り歩いて、
もたぐるやうにするよ。又犬の諸聲に、長々と鳴きあげたる、ま
がまがしくにくし。めのとの男こそあれ、女はされど、近くも寄
らねばよし。をのこ兒をば、たゞわが物にして、立ちそひ領じて
うしろみ、聊かもこの御事に違ふ者をば、讒し、人をば人とも思ひ
たらず、怪しけれど、これが咎を心に任せて言ふ人もなければ所

得、いみじきおも、ちして事を行ひなどするよ。(枕草子)

八 源氏物語

五十嵐 力

こゝに聰明にして情に厚く美を愛する一團の人間があつて、國民中の最高階級に位し、其の國最高の教育を受け、而して其の國特殊の文化が成立ちかけた時に生れたと假定せよ。此の時、國民中の他の一團が彼等を保護して、衣食はもとより政治・兵馬の實務に至るまで、煩はしい事は一切吾等が引受けるによつて決して心配なざるな、たゞ風雅の道に心を潜めて楽しく美はしく世を送られよ。といつて、山水明媚なる一郭の土地を其の遊樂の場所にあてがつたと假定せよ。かくして彼等は生活の苦を知らず、事務の煩を知らず、干戈の慘を知らず、感情・文藝の世界

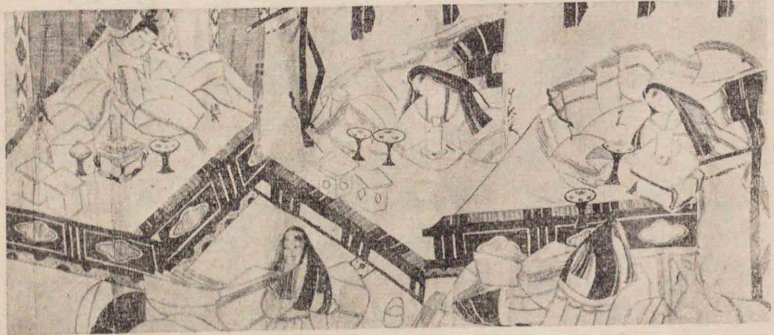
五十嵐力
國文學者
文學博士
早稻田大學教授
明治七年山形縣
生

にほしいまゝに悠遊して二百年・三百年を過したとせよ。其の結果、一代の風潮が感情本位になるべきは見易き道理である。従つて其の弊が流れて文弱になり、奢侈になり、淫靡になり、婦女子が重んぜられるやうになり、臆病な陰險な謀計が行はれるやうになつて、腐敗墮落を極むべきことも亦争はれぬ自然の徑路である。

藤原氏專權時代の宮廷生活、公卿生活は、まさしくかくの如きものにして、又まさしくかくの如き結果に達した。彼等は支那・印度の文明が漸く我が國情と融和して、まさに特色ある文明が成立たうとする時にあたり、新文明建設の責任ある地位に居りながら、不思議な運命に操られて、現實と懸け離れた内裏雛式の生活を造ることとなつた。彼等は虚位を擁して、對人民・對國土の

嵐鴨
京都市右京區の
西部にある嵐山
と東山區の西境
を流れる鴨川

政務とは殆ど全く相關することがなかつた。大臣・納言はたゞ朝廷の儀式を行ふための役目、大將・中將は弓・胡籥に威嚴を飾る名義だけの武官、文官は民情を知らず、又知らうともせず、武官は武事を習はず、戦争を夢にも見ず、文武を問はずして滿廷悉くこれ宮内官、悉くこれ風流歌人であつた。彼等ほど自然に遠ざかつた者は無い。彼等は嵐鴨の山紫水明を賞し、春花・秋葉の美を争つたとはいふものの、脚下なる土地や、土地に關した物には一顧を與へる事をも屑しとしなかつた。露を見て、何の玉ぞ。と問ひ、農産物を見て、蕪めくもの、大根らしきもの、葱とかいふものなど言ふのが、彼等の間に於ける一種の誇で、土臭い物は賤山がつと共に、すべて「怪賤」の二義を兼ねた「あやし」といふ形容詞の下に却け去られるを常とした。彼等は自ら稱した通り、地を離れ政



源氏物語 藤原隆能 繪卷

務を離れた殿上人・雲の上人であつた。而して彼等を羨みながら、其の地位を奪はうとはせず、甘んじて其の下風に立ち、其の爪牙となり、藩屏となつて、彼等を荒い風にあてず、彼等の逸遊費を負担して風流を恣にせしめた者が即ち地下人等である。彼等は地下人が自覺して自立の念を起すに至るまで、快く雲上の夢を貪ることを得たのである。此の感情本位・文藝本位の時代思想が十分に發展して行くべき所まで

行つた社會——歌舞・遊宴・歌合・繪合・供養・祈禱・祭禮・方違及び婦人中心の權力争ひなどが盛に行はれた社會——藤氏の專權を機會として造化翁が描き出した古今東西に比類なき情の社會——端麗なる容姿の前には虎狼も微笑を獻じ、物のあはれを知る者には鬼神も不義を赦すと考へられた社會——平安朝の前後四百年中其の特色の最もよく發揮された時代の社會——此の一あつて二なき社會、再び現るべからざる社會をば、當時漸く出來たばかりの新しき假名文字を用ひ、今しも方に熟したる新國語を用ひ、洗煉推敲を重ねて、立派に活きくと描き出したものが、即ち紫式部の源氏物語五十四帖である。

感情本位・文藝本位といふ如き單純な言葉で前後四百年に互る平安朝を説明するのは、或は獨斷に過ぎるであらう。けれども

ダンテ
Dante (1265-1321)
イタリアの大詩人

神曲
Divina Commedia
ダンテの傑作

スコラ哲學
Scholastic Philosophy
第九世紀より第十五世紀にいたるキリスト教哲學の主流

時代思想の中心が此處に在つたのは疑のないことである。又源氏物語が平安朝社會を遺憾なく寫したといふのも多少穩當でないかも知れぬ。けれどもダンテの「神曲」が全盛時代のスコラ哲學の理想を描いたといはれるほどの意味で、源氏物語が成熟したる平安朝の理想を寫したといふに異論はあるまい。又此の時代の文學は土佐日記・竹取物語を初めとして、落窪物語・宇津保物語・古今集・枕草子・狭衣物語・榮華物語・大鏡等、一つとして此の時代思想に觸れて居らぬはないけれども、源氏ほど切實に此の思想に觸れ、源氏ほど圓滿に此の思想を現したものはない。

本居宣長は「玉の小櫛」に「源氏」を稱して、在來の物語に現れた人物の類型的なるに反して個性を書分けた事、在來の物語が事件・趣向の奇抜を狙つたのに反して人情を寫し、平凡・自然の事柄を寫

した事、漢文一流の粗漫なる形式的文章に反して心理變遷の過程を精細に描いた事、これが此の物語の特色であるといふ意味のことを述べてゐる。これは時代を超越した卓見で、誨淫の書といひ、教訓の書といひ、佛理を現した作といへる類の愚説の、足許にもよられぬ大批評である。江戸中期以前の和漢の文學だけを見た人の批評とて、過褒の嫌はあるが、とにかく急所を捉へ得た名批評といつてよい。

宣長の評でも知られる如く、源氏物語は我が明治以前の文學中の最大傑作の一で、殊に現實的・自然的・平凡的・精寫的なる最近文學の趨勢を豫想したと見られる點さへある。別して驚くべきは、源氏が世界に於ける最古小説の一たる事である。小説を譬喩物語や傳奇の類と區別して、人情展開の過程を寫した物語と

リチャードソン

Richardson
(1686-1761)
イギリスの
小説家

パメラ

Pamela

ボツカチオ

Boccaccios
第十四世紀の
イタリーの小
説家

デカメロン

Decamerone
ボツカチオの
傑作
十日物語

いふ意味に解すれば、英國の小説はリチャードソンの「パメラ」の出でた一千七百四十年、即ち今より約百七十年以前に其の端を開くといはれる。西洋に於ける寫實小説の元祖と謂はれるボツカチオの「デカメロン」の公にされたのは一千三百五十三年、即ち今より約五百六十年前である。支那・印度には、無論「源氏」以前に此の意味の小説といふものがなかつた。此の見地よりすれば、我が源氏物語は、日本に於ける最初の小説であるのみならず、又東洋最初の小説であるのみならず、或は世界に於ける最初の小説であるかも知れぬ、少なくとも、世界最古最大の小説の一たる事は疑なきことである。然るに、かゝる古文學の寶典が名のみ徒らに高くして廣く讀まれぬは何のためか。たゞに普通人の間に於てのみならず、國文研究者にすらも通讀されぬ場合の

往々あるは何故か。思ふに、これ一つは其の題目たる宮廷生活が、後代の國民に對して餘りに懸け隔つて理解し難くなつたため、一つは平安朝の朦朧たるほのかしぶりの語格文體が、直截明快を欲する後世の讀者の理解力に多大の租税を掛けるため、一つは洗煉を極めて煎じ詰め過ぎた文體が、走り讀みを常として繰返して讀むことを好まぬ後世の讀者の頭に入り難いためであらう。かやうな面倒・不便利はあるが、我が文學の誇となるべき此の傑作を、此のまゝ棚に上げて敬遠主義を取るの、如何にも残念な事である。(新國文學史)

九 藝術の鑑賞

厨川白村

生命に普遍性があるかぎり、廣い意味の生命そのものが直ちに

厨川白村
名は辰夫
英文學者
文學博士
京都帝國大學教
授
大正十二年歿
年四十四

讀者と作家との間の共通共感性を構成し得るものであることは言ふまでもない。たとへば生命の最も著しい特徴の一つである律動の如き、それは如何なる場合にも必ず一人より他人へと傳はる性質を持つてゐる。一方でピアノを弾ずれば、聾者にあらざる限は、聽者の方でも知らず識らずその音を聞いて手拍子・足拍子を取る。たとひそれを動作に現さずとも、心のうちで踊る。即ちピアノの鍵盤をたゞく音は、聽者の生命の中心を動かして、そこに新しい振動を喚び起す刺戟的暗示性を有してゐるからである。生命そのものの共鳴であり、共感である。かくの如くにして讀者と作家との心境がびつたり行き合つたところに生命の共鳴共感がある、そしてそこに藝術の鑑賞は成立つ。だから讀者・觀客・聽衆が作家から受けるところのものは他の科

學者や歴史家・哲學者などの所説に對する場合とちがつて、それは知識を得るのではない。象徴即ち作品に現れた事象の刺戟力によつて、自分の生活内容を發見するのである。藝術鑑賞の三昧境、又その法悦は、即ちこの自己發見の喜に他ならぬ。象徴といふ刺戟暗示性の媒介物を借りて、作者が表現しようとした自己の内生活を、讀者もまた自分の胸臆中に見出し、これと共鳴する歡喜である。ちやうど睡魔に襲はれた時、我とわが手に自分の膝をつねつて、自分の生きてゐることを發見すると同じやうに、人は文藝作品に接して自分の生きてゐることを感ずるのである。詳しく言へば、讀者みづから自己の無意識心理の中味を發見するのである。自分の魂の姿を、詩人や藝術家が掲げた鏡の中に見出すのである。この鏡あることによつ

て、人は自分の生活内容をまざく／＼と見ることが出来るのだ。同時にそれはまた、自分の生活内容を深くし、大きくし、豊かならしめる最好の機會を得るものである。描かれたる事象は象徴に過ぎない。夢の外形に過ぎない。この象徴の刺戟あるによつて始めて讀者と作家と兩方の無意識心理の内容、即ち夢の潜在内容が共鳴し、共感する。そこに文藝作品から滲み出で涌き出るところの實感味があるのだ。夢の潜在内容、それが即ち人生の苦悶である、世界の苦惱である。だから、文藝作品が與へるところのものは、知識ではなくして喚起作用である。讀者を刺戟して自己體驗の内容を自ら喚起せしめるものである。讀者がこの刺戟を受けて自ら燃えるのは、即ちまた一種の創作に他ならぬのである。作家が自分の生命

を象徴によつて表現したとすれば、この象徴をとほして讀者もまた自分の胸中に創作をしてゐるのである。作者の方が産出的創作をして居るとすれば、讀者はこれを受入れて、自らまた共鳴的創作を爲すものである。この二重の創作があつて、はじめて文藝の鑑賞は成立つのである。

かるが故に、抑壓を免れた絶対自由の創造生活を享有し得るものは獨り作家ばかりではない。たと「人」として生きてゐる他の幾千萬幾億萬の普通人も、亦作品の鑑賞によつて、作家と同じ創造生活の境地に完全に味到してゐるのである。この點から言へば、作家と讀者との差は、自らこれを象徴化して表現すると然らざるとの別に過ぎない。換言すれば、文藝家は表現によつて創作をなし、讀者は喚起によつて創作をなす。われら讀者が大

詩篇・大戲曲を鑑賞してゐる際の心狀は、ちやうど他人の踊るのを見、歌ふのを聴いてゐる時に、われらみづからは踊らずとも歌はずとも、心の中で別に踊りもすれば歌ひもしてゐると全く同様だ。その時、それはもう他人の踊や歌ではなく、われらみづからの踊であり、歌であるのだ。詩歌を味はふとき、われらみづからも亦既に詩人であり、歌人である。作家と同じ創造・創作の生活を營んで、抑壓作用から脱却した夢幻・幻覺の境地に引入れられてゐるわけだ。引入れるだけの暗示作用をしたものが即ち象徴である。

かくて鑑賞も亦一種の創作であるからには、そこに個性のはたらきが根抵となつてゐることは言ふまでもない。即ち同一の作品から受ける感銘や印象もまた個人々々によつて異なるわ

ボードレール

Baudelaire
(1821—1867)
フランスの詩人

けてある。一つの象徴をとほしてそれから受入れる思想感情・気分などは、鑑賞者みづからの個性や體驗や生活内容によつてそれ／＼ちがふ。象徴から受ける感銘によつて、讀者は自分の内的生命に火を點じて自ら燃焼するのである。換言すれば、自分の體驗の内容をこれによつて發見し、作家と同一の心境に味到することを得るのである。その體驗の内容を成してゐるものは、作家の場合と同じく、人間苦であり、社會苦であらねばならぬ。この苦悶、この心的傷害は、鑑賞者の無意識心理の中にも同じく沈滓として伏在してゐたが故に、完全なる鑑賞即ち生命の共鳴共感がそこに成立つのである。こゝに至つて、私は嘗て讀んだボードレールの散文詩に、わたしの言はんとするところを巧に譬喩した「窓」と題する一篇のあ

つたことを想ひ起す。

開けた窓の内部を外から見てゐる人は、閉ぢた窓を見てゐる人ほど多くのものを見ることは出來ない。蠟燭で明るくなつてゐる窓、それにも増して深みがあり、神祕的であり、夢幻的であり、陰暗であり、眩惑的であるものがまたとあらうか。煌煌たる白日のもとに見得るものは、窓硝子の後に在るものよりはいつも興味の少ないものである。あの黒くて明るい穴のなかに、生は生き、生は夢み、生は惱んでゐるのだ。波うてる屋根の彼方に中年の女が一人ゐる。もう皺が寄つて、貧乏で、いつもうつむいて何かしてゐる。外へも出ては行かない。その顔つき、着物、身振から、また何といふ事はなしに、私はあの女の身の上、その來歴を想像して見た。そして時々

それを自分で繰返して見ては泣くのである。
 あれが若し女でなく、貧乏な老翁であつても、私はやはりその
 男の來歴をたやすく想像したのであらう。
 そして私は寢に就く、自己以外の他人に於て私は生きもし、惱
 みもしたことを得意に思つて。
 君は恐らく言ふだらう、そんな來歴が眞であると君は信じて
 るのか」と。私以外の現實がどうあらうと構ひはしない。
 唯私はこれによつて生き、自分が存在するといふこと、自分が
 如何なるものであるかといふこと、それを感じさへすればよ
 い。(大意)

蠟燭の光に照された閉ぢた窓は作品である。そのなかにある
 女の姿をちらと見て、讀者は自分の胸中に色々な創作をするの

である。その窓、その女をとほして、實は自分を發見してゐるの
 だ。自己以外の他人に於て自分は生きもし、悩みもしてゐるの
 だ。そして自分の存在と生活とを感じもし、味はひもしてゐる
 のだ。鑑賞とは即ち彼のうちに我を發見し、我のうちに彼を見
 出すことである。(苦悶の象徴)

一〇 石彫獅子の賦

薄田泣堇

薄田泣堇
 名は淳介
 詩人
 新聞記者
 明治十年岡山縣
 連島町生

番者に問へば、石工は
 木かげの夢に耽りぬと。
 去りて小暗き仕事場に
 刻みさしたる唐獅子の
 圓き頤を手になでて、
 誰そ吟ずるは靜やかに。
 朽木の棚にすゑられて、
 顔くすぼれるあら彫の

豕いぬころ野の狐、
こは秀でたる驕かな、

さては雄鹿のむらがり、
日浴びて立てる獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて、

雄々し、憤るか其の姿。

鬣長く脊に巻きて、

見れば涌きよる春の潮。

胸はゆたかに、力男が

引きしぼりたる弓のごと。

明王

不動明王

忿怒現ずる明王の

廣き肩より燃えあがる

焰か、長き尾は躍り、

綿毛密なる脚の裏

落ちて野薔薇の花踏むも、

巢くへる鳥は目覺めんや。

(石工妙じき心得よ。)

瞳子彫られぬ唐獅子は、

光を知らぬ盲目の身。

鼻かんばしき香を嗅ぐも、

いまだ前脚ふみあげて

花園小路亂さじよ。

鑿の手またく捨てられて

御苑の夏のあけほのや、

緑したゝる木のかげに

巨人の如く立たん時、

雄姿如何に、脊に伏して

暫し想像に耽らせよ。

汝の王者かたどられ、

眞白き石に刻まれぬ。

野より、山より、林より

つどへよ獸、列なりて、

蹄の前にひざまづき、

弱きを恥ぢて僕たれ。

偉なる靈魂くだりきて、

眞白き石に包まれぬ。

野より、山より、林より
その光輝に浴びぬべく

つどへよ獸列なりて、
卑き心をなげうてよ。

大いなる權威あらはれて、

眞白き石に具せられぬ。

野より、山より、林より

つどへよ獸列なりて、

王に捧ぐる燔祭の

聖き火盞を整へよ。

斑の牛と羚羊は、

深き痛手に甘んじて、

進みて燃ゆる火に焼けよ。

誇るべきかな、犠牲の

高き譽は汝にあり。

羨む群ぞ愚かなる。

見よ、犠牲はそなはりぬ。

獅子は額に鬣の

長き流をふるはせて、

あら起ちあがる、戰鬥と

勝と力の權化なり。

伏せよ。と呼べば皆伏しぬ。

盛なるかな、其の令や。

自然は死せり、永久に。

人は魔のごと強からず。

「われは王者ぞ、萬有の

値のみなもとぞ、煩と

悶の胸の主人なり。

あゝ運命の眩きをも

眼ひらきてながめ入り、

胸わなゝかぬ雄心の

若き勇氣にあふれたる、

勝利のおもひに漲れる

此の身、此の世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、

われは汝の伴なり」と、

聲は喇叭の音に似たり。
高き讚美と服した従がひは

時に黙もだ止だしは破られて、
雷のどよみに現れぬ。

いま想像の羽たわむ。
豊かにもまた静かなる

見れば唐獅子日を浴びて、
姿、何等の誇ぞや。

石彫長く傳はりて、
あゝ藝術は支配せよ。

榮はえとならんは幾千歳。
とはの生命いのちぞ汝まに歸する。

(ゆく春)

四條大納言

藤原公任
關白賴忠の子
詩歌音楽の達人
和漢朗詠集の撰
者
長久二年(1101)
薨
年七十七
大入道
藤原兼家
賴忠の從弟
關白太政大臣
正暦元年(1050)
薨
年六十二

一一 御堂關白の幼時

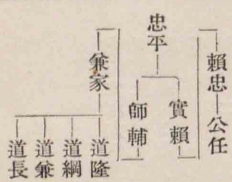
四條大納言のかく何事もすぐれてめでたくおはしますを、大入道殿、いかでかゝらむ。羨ましくもあるかな。わが子どもの影

中關白殿

關白藤原道隆
兼家の長子
長徳元年(1055)
薨
年四十九
栗田殿
關白藤原道兼
兼家の次子
正暦五年(1054)
薨
年三十五

だに踏むべくもあらぬこそくちをしけれ」と申させたまひければ、中關白殿、栗田殿などは、げにさもとおぼすらむと、恥かしげなる御氣色にて、ものものたまはぬに、この入道殿はいと若うおはします御身に、影をば踏まて、面つらをやは踏まぬ」とこそ仰せられけれ。

さるべき人は、疾うより御心魂の猛く、御守りもこはきなめりと覺え侍るは。花山院の御時に、五月下つ闇に五月雨も過ぎて、いとおどろくしくかきみだれ雨の降る夜、帝さうくしくや思召しけむ、殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましたしけるに、人々御物語などしたまひて、昔恐しかりける事どもなどに申しなり給へるに、今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ。かく人がちなるにだに、けしき覺ゆ。まして物離れたる處などいかな



入道殿

關白太政大臣藤

原道長

萬壽四年(六七)

薨

年六十二

豐樂院

八省院の西

儀式宴會などを

行ふ處

仁壽殿

紫宸殿の北

内宴相撲蹴鞠な

どを行ふ處

大極殿

八省院の中央に

ある正殿

朝政を視且大禮

を行ふ處

昭慶門

大極殿の北の門

らむ。さあらむ處に一人往なむや。と仰せられけるに、え罷らじ。とのみ申し給ひけるを、入道殿は「いづくなりとも罷りなむ」と申し給ひければ、さる所おはします帝にて、いと興あることなり。さらば往け。道隆は豐樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へ往け。と仰せられければ、よその君達は、便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又承らせ給へる殿ばらは御氣色變りて、益なしと思しけるに、入道殿はつゆさる御氣色もなく、私の従者をば具し候はじ。この陣の吉上まれ、瀧口まれ、一人昭慶門まで送れと仰言たべ。それより内には、一人入り侍らむ。と申し給へば、證なきことと仰せらるれば、げに。とて、御手箱におかせ給へる刀申して立ち給ひぬ。今二所もにがむく、各おはしましぬ。子四つと奏して、かく仰せられ議するほどに、丑にもなりにけむ。

右衛門の陣

宜秋門の内

承明門

紫宸殿の南の門

宴の松原

豐樂院の北手の

空地

道隆は右衛門の陣より出でよ。道長は承明門より出でよ。とそれをさへわかたせ給へば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じておはしたるに、宴の松原のほどに、その者ともなき聲どもの聞ゆるに、すぢなくて歸り給ふ。栗田殿は露臺の外までわな、くくおはしたるに、仁壽殿の東面の砌のほどに、簷とひとしき人のあるやうに見え給ひければ、ものも覺えて、身の候はばこそ仰言も承らめ。とて、各立歸り參り給へれば、御扇を叩きて笑はせ給ふに、入道殿はいと久しう見えさせたまはぬを、いかがと思召すほどに、ぞいとさりげなく、事にもあらずげにて參らせ給へる。「いかにく」と問はせ給へば、いとのどやかに、御刀に削られたるものを取具して奉らせ給ふに、こは何ぞ。と仰せらるれば、たゞにて歸り參りてはべらむは證さぶらふまじきによりて、

高御座
大極殿の中央に
安置せられてあ
る御座

高御座の南表の柱のもとを削り候なり。とつれなく申し給ふに、いとあさましう思召さる。こと殿たちの御氣色は今にも直らで、この殿のかくて参り給へるを、帝より始め感じの、しられ給へど、羨ましきにや、又いかなるにか、物もいはでぞ候ひ給ひける。なほ疑はしく思召されければ、つとめて、藏人して、削り屑を遣はして見よ。と仰言ありければ、もて行きて、おしつけて見たうびけるに、つゆ違はざりけり。その削り跡はいとけざやかにて侍るめり。末の世にも見る人はなほあさましき事にぞ申ししかし。

(天鏡)

御堂
法成寺
もと京極土御門
にあつた
京都市上京區仙
洞御所の附近

一二 法成寺の造營

今は御心地例ざまになり果てさせ給ひぬれば、御堂の事思し急

攝政殿
藤原頼通
道長の長子
世に宇治關白と
いふ
承保元年(七三三)
薨
年八十三
殿の御前
道長

がせ給ふ。攝政殿國々までさるべき公事をばさるものにて、まづ此の御堂の事を先につかうまつるべき仰言のたまふ。殿の御前も、此の度生きたるは別事ならず、此の願の叶ふべきなめり。と宣はせて、他事なく、たゞ御堂におはします。方四町をこめて大垣にして、瓦葺きたり。様々に思しおきて急がせ給へば、夜の明くるも心許なく、日の暮るゝも口惜しう思されて、夜もすがらは、山を疊むべきやう、池を掘るべきやう、木を栽ゑなめさせ、さるべき御堂々々、方々様々造りつゞけ、御佛はなべてのさまにやはおはします。丈六の金色の佛を、數も知らず作りなめ、そなたをば北南と馬道^{めだう}をあけて、道を整へ造らせ給ひて、廊渡殿かず多く作らせ給ふ。雞の鳴くも久しく思され、宵曉の御行も怠らず、安きいも大殿ごもらず、唯此の御堂の事のみ、深く御心にしませ給

御封
御封戸の略
皇族大官などに
賜はつた民戸

へり。
日々に多くの人々参り罷て立ちこむ。さるべき殿ばらを始め奉りて、宮々の御封御莊どもより、一日に五六百人、千人の夫どもを奉るにも、人の數多かることをば、かしこきことに思したり。國々の守ども、地子官物をおそなはれども、只今は此の御堂の夫役材木、檜皮瓦など多く参らする事を、我もくときほひつからまつる。大方近きも遠きも参りこみて、品々方々、あたりくにつかうまつる。
或所を見れば、御佛つかうまつるとて、佛師ども百人ばかり並みゐてつかうまつる。同じくはこれこそめでたけれと見ゆ。御堂の上を見上ぐれば、工匠ども二三百人のほりゐて、大きな木どもには太き綱をつけて、聲を合せてえさまさと引上げさわぐ。

御堂の中を見れば、佛の御座作りかゝやかす。板敷を見れば、木賊掠の葉桃のさねなどして、四五十人手毎に並みゐて磨きのご



法成寺の造營
中澤弘光筆

ふ。檜皮葺壁塗
瓦作なども數を
つくじたり。又
年老いたる翁な
どの、三尺ばかり
なる石を、心に任
せて切りとゝの
ふるものあり。

池を掘るとして四五百人おりたち、山を疊むとて五六百人のほり
たち、又大路の方を見れば、力車にえもいはぬ大木どもに綱をつ

大津 滋賀縣大津市
梅津 京都市右京區梅津
桂川の左岸

須達長者

祇園精舎を建てて佛に奉つた天竺の舍衛國の豪商
Sudatta
祇園精舎 釋迦が度々説法をした中印度の寺

けて、叫びの、しりて引きもてのぼる。鴨川の方を見れば、筏といふものに、樽材木を入れて、棹さして心地よげに歌ひの、しりて上るめり。大津・梅津の心地するも、西は東といふことはこれなりけりに見ゆ。磐石といふばかりの石を、はかなき筏にのせて率て來れど沈まず。すべて色々様々いひつくし、まねびやるべき方なし。かの須達長者の祇園精舎作りけむも、かくやありけむと見ゆるを、冬の室、夏の風、各、ことごとくなり。かゝる御勢にそへて、入道せさせ給ひて後は、いとまさらせ給へりと見えさせ給ふにも、猶なべてならざりける御有様かなと、近う見奉る人は尊み、遠う見奉る人は、遙かに拜み參らす。今は此の御堂のあたりの本草ともならむと思へる人のみ多かりき。そなたさまに赴けば、海の浪もやはらかにたちて、此の御堂のも

長谷寺 奈良縣磯城郡初瀬町にある眞言宗の名刹

天王寺 大阪市天王寺區にある四天王寺

十九日 二條天皇平治元年(一一七二)十二月十九日

のを持て運ばせ、河も水澄みて、快く浮べもて參ると見ゆ。なほなべて、此の世の事とは見えさせ給はず。まづは、先年に長谷寺にある僧の、御祈禱をいみじうして寐たりける夢に、大きにいかめしき男の出で來て、何かかく殿の御事をばともかくも申し給ふ。弘法大師の、佛法興隆の爲に生れ給へるなり」とぞ見えさせ給ひける。又天王寺の聖德太子の御日記には、王城より東に佛法弘めむ人を我と知れ」とこそは書きおかせ給ふなれ。いづれにてもおろかならぬ御事なり。(榮華物語)

一三 光頼卿の參内

さる程に、内裏には同じき十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の振舞過分なりとて、不參

光頼
藤原顯頼の子
世に桂大納言と
いふ
信頼は光頼の甥
束帯
文官の正服
腹巻
簡略な鎧
袖なく脇立なく
後で合せる
雑色
雑役をつとめる
下部

宰相
參議の唐名
定員八人

にておはしましけるが、參内して承らんとて、ことに鮮かに束帯引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩きたまひ、めのと子の桂右馬允範能に、膚に腹巻着せ、雑色の装束に出でた、せ、自然の事もあらば人手にかくな、汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。とて御身近く置き、其の外、清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて表々門々を堅く守護しけるを事ともせず、さき高らかに追はせて入りたまへば、兵どもも大いに恐れ奉り、弓を平め、矢をそばめて通したてまつる。

紫宸殿の後を経て殿上を廻りて見たまへば、信頼卿一座して、その座の上、藤たち皆下にぞ着かれける。光頼卿、こは不思議のことかな。人はいかに振舞ふとも、かれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には着くまじきものを」と思はれければ、左大辨宰相



(面前) 圖帶束

懐中ニ貼紙アリ

此文ハ丁子唐草也

冠四位以上有文冠ヲケ緒紙ヨリ

白小袖ニエリ

蒔繪劔 柄頭ニ垂ル緒ヲ目貫緒ト云 緒ノ先ノ金物ヲ露ト云

赤キハ單也

裾下裳ノシリ也余ハ別ニ切ハナシテ用ユ

笏木笏也

平緒ノタリ欄ト云

表袴文眞紫禁色ト云

長方
藤原顯長の子
光頼と従兄弟

下襲の尻
袍の下に着る衣
の裾

長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそよにしどけなう見え候へ」と色代して、しづく」と歩み、信頼卿の上にもむずと着きたまふ。

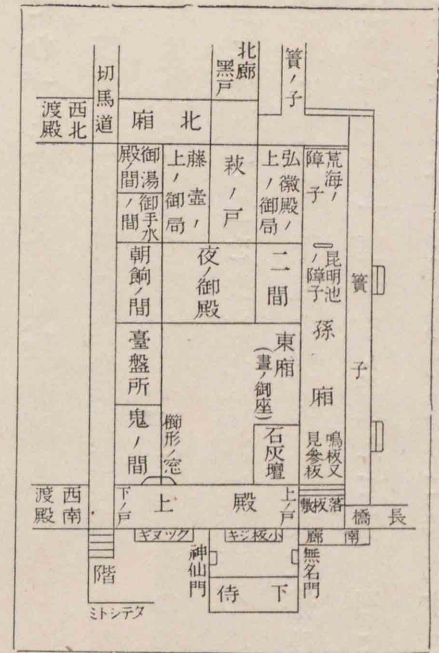
光頼卿は信頼卿のためには母方の叔父なる上、大力の剛の人なれば、殊に恐れて見えられたり。右の袖の上に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、着座の公卿「あなあさまし」と見たまふに、光頼卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏取直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すると見えて候。召に參ぜざらん者をば死罪に行はるべしとやらん承りて參内するところなり。抑、何事の御詫ぞ」と問ひけれども、信頼卿物も宣はず、着座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て光頼卿つい立ちて、悪しう參つて候ひけり」とて、しづく」と歩み出でられ



(面後) 圖帶束

けり。

庭上に充ち満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。去んぬる十日より多くの人出仕したまひつれども、右衛門督殿の座



清涼殿内圖

はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりか頼しからん」と申せば、傍なるものの、昔頼光頼信とて源氏の名將おは

も、右衛門督殿の座
上に着く人一人も
おはしまさざりつ
るに、しいだしたる
ことよ。門を入り
給ふより、聊かも臆
したる體も見え給

しましき、その頼光を打返して光頼と名のり給へば、これも剛に
ましますぞかし」といへば、又傍より、などその頼信を打返して信
頼と付き給ふ右衛門督殿はあれほど臆病にはおはしますぞ」と
いへば、壁に耳、天に口」といふことあり、恐しく。聞かじ」といひ
ながら、皆忍び笑ひに笑ひけり。

光頼卿かやうに振舞ひたまへども、急ぎても出でられず、殿上の
小薨の前、見參の板高らかに踏みならして立たれたりけるが、荒
海の障子の北、萩戸の邊に弟の別當惟方のおはしけるを招き寄
せ、宣ひけるは、公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定
めたることもなし。誠やらん、光頼も死罪に行はるべき人數に
てあなる。傳へ承るときは、その人皆當時の有職、然るべき人
どもなり。その内に入らんこと甚だ面目なるべし。さても、先

小薨
日除の戸
風雨をもよける
見參の板
又鳴板
釘を打ちつけて
ない板敷
荒海の障子
表に長足長裏
に宇治の網代の
繪をかいた衝立
惟方
左兵衛督檢非違
使別當藤原惟方

少納言入道
少納言藤原通憲
入道信西

日、右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に神樂岡へ向はれけることはいかに。以ての外、然るべからざる振舞かな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら人の車の尻に乗りたまふこと、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中、首實檢は甚だ穩便ならず」と宣へば、別當、それは天氣にて候ひしかば、とて赤面せられたり。

光頼卿重ねて、「こはいかに、勅諭なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。我等が曩祖勸修寺内大臣、三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣又十一代、承り行ふことは皆これ徳政なり、一度も悪事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、偏に有道の臣に伴なつて讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもどかるゝほどの事はな

勸修寺内大臣
藤原高藤
三條右大臣
高藤の子定方

切目
和歌山縣日高郡
切目村

かりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて、累家の佳名を失はんこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして切目の宿より馳せのぼるなるが、和泉紀伊賀伊勢の家人等待受けて大勢にてあなる。信頼卿が語らふところの兵そこばくならじ。平家大勢押寄せて攻めんには、時刻をやめぐらすべき。もし又火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡らせ給ふべき。灰燼の地となりたらんだにも、朝家の御歎なるべし。いかにいはんや君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衛門督は御邊に大小事を申しあはすとこそ聞ゆれ。相構へて、隙を窺ひ、玉體恙なくおはします様に思案せらるべし。さて主上にいづこにおはしますぞ。黒戸御所に。「上皇は。」一本御書所に。「内侍所は。」溫明殿に。「劍璽は

一本御書所
内裏の東門建春
門の内にあつた
内侍所
神鏡
溫明殿
紫宸殿の東

朝餉 天子の御膳を聞
召すところ
櫛形 晝の御座と鬼の
間との間にある
櫛の形をした穴

いづこに。「夜の大殿に」と左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當
かくぞ答へられける。
又、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ」と宣
へば、それには右衛門督住み候へば、その方様の女房などぞかげ
ろひ候らん」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ほ
かくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住、み
君をば黒戸御所に遷し參らせたり。末代なれども、さすがに日
月は未だ地に墜ち給はぬものを、天照大神、正八幡宮は王法をい
かが守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありと雖も、我が朝
にて未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。と
て、のろくしげに憚る所なく、どき給へば、惟方は「人もや聞く
らん」とよにすさまじげにて立たれたれども、かつは悲しくて、わ

許由

堯が位を禪らう
といつたので汚
れた事を聞いた
とて耳を潁川の
水で洗つたとい
ふ高士

高山樗牛

名は林次郎
文藝評論家
文學博士
羽前國鶴岡生
明治三十五年歿
年三十二

釋迦

Sakya

伽毘羅國

中印度にあつ
た王國
恆河の支流
Kapilavastu
カピラバ
スチニ河のほと
り

れいかなる宿業によつてかゝる世に生れあひ、憂き事をのみ見
聞くらん。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を聞かん輩
は耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ」とて、上の衣の袖絞るばか
り泣かれけり。信頼卿の座上に着かせられし時はさしもゆゝ
しく見えたまひしが、君の御事を悲しみて、打萎れてぞ出でたま
ひける。(平治物語)

一四 世界の四聖

高山樗牛

生れて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人に非
ずんば誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテス・基督の四
人、世呼んで世界の四聖と稱す、宜なるかな。
釋迦は西曆紀元前凡そ六百年の頃、印度伽毘羅國の王家に生る。

悉達多
Sidarthartha
頓吉と譯す
佛陀
Buddha 佛
浮屠 浮屠

Hiranyavati
跋提河



釋迦子
釋道吳
筆

父は淨飯王、母は摩耶夫人、其の本名を悉達多といふ。釋迦は伽毘羅王家の族名にして、佛陀は其の出家成道せる後の尊號なり、釋迦、身は一國の太子に生れけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳其の妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隠れて道を修むること六年、終に人生の奧義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間北天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は即ち釋迦一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。さ

木鐸

金口木舌、施、政教、時、所、振、以、警、衆、者、也。
(論語註)

魯國

今の山東省の内

大司寇
裁判の長官
齊侯
景公

れど徒らに思索の高遠を欽びて人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘澹たる苦行とによりて安心の道を求めたり。其の流派を樹てて相争ふ所は畢竟名目上の優劣のみ、未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生れ、其の浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て一世の木鐸となり、民をして歸依する所を知らしめたり。孔子名は丘、孔子は其の尊稱なり。今を去る二千一百餘年の昔、支那の魯國に生る。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて夙に令聞あり、學徳愈進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外其の風采を想望す。時に齊侯、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざらしむ。孔

子、時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高足を率ゐて四方の遊説を試みぬ。當時の支那は謂はゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を掃へり。或は臣にして其の君を弑する者あり、子にして其の親を害する者あり。強は弱



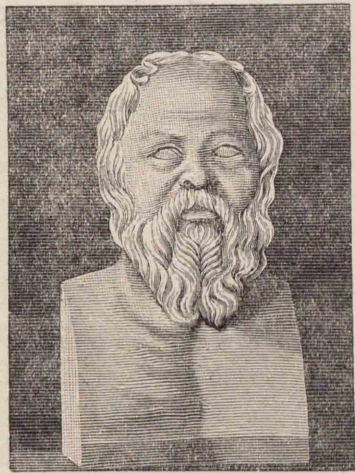
孔子
子道

を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出て、大義名分を天下に唱へて狂瀾を既倒に廻さんとす。その志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方に漂浪すること十三年。時非

ソクラテス
アテネ
Socrates
Athenae
(Athens)

にして道容れられず、世復耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じて曰く、嗚呼、吾が道終に窮せり。世終に吾を知る者なきか。と。門弟子貢慰めて曰く、何ぞ夫子を知る者なからんや。孔子曰く、天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾を知る者はそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。と。幾何もなく歿しぬ。時に年七十三。ソクラテスは希臘のアテネ府に住める一彫刻師の子なり。其の生れしは凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦、孔子と年を隔つること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは奇なりと謂ふべし。希臘の當時は所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の争に留り、道德は空文

の上にもみ貴ばれたり。其の状なほ釋迦當時の印度のごとく、人生社會の實際に關しては殆ど裨益するところ無かりき。ソクラテスは慨然として時弊の救濟を以て自ら任じ、盛に道を講



ソクラテス

じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學派の輩に遇へば、則ち其の獨得の論法を以て辯難攻撃して一步も假借せず、侃諤の正義は其の稀代の雄辯と相伴なひて一世を風靡せり。然るに、喬木は風に折らるゝの喩に漏れず、群小のソクラテスに快からざるもの相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテスを讒訴せり。其の訴狀に曰く、ソクラテスは國教を信ぜずして異教を

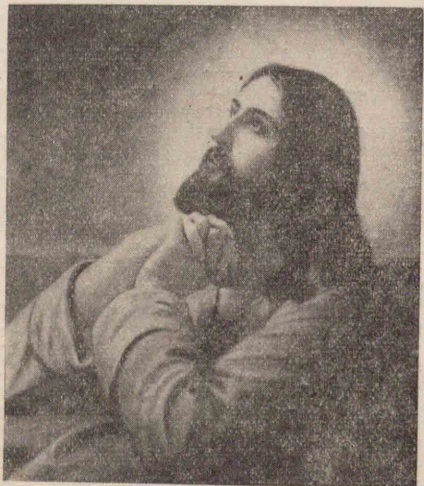
Asclepias
アスクレピヤス
醫藥を掌る神

靱め、人心を惑亂せり。國法によりて死刑に處すべし」と。ソクラテスがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官はソクラテスを以て傲岸不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテス泰然として驚かず、曰く「命のみ」と。其の獄中にあるや、常に其の門弟子を集めて生死、靈魂、未來の事を説き、人の脱獄を勸むるものに對しては、輒ち答へて曰く、「予は唯正義に導かれんのみ。死また何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上にある」と知らずや」と。終に従容として毒を仰いで歿しぬ。將に歿せんとするや、弟子遺言を求む。ソクラテス曰く、「爾、一雞を以てアスクレピヤスの神に捧げよ」と。蓋し曾て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしなり。

基督 Jesus Christ 耶蘇
 小亞細亞のバ
 ートレヘム
 レスチナの
 市
 Bethlehem
 エルサレム
 の
 西南約十
 料
 ヨセフ
 Joseph
 マリヤ
 Maria
 ヨハネ
 Johannes
 ヘブライの
 有
 名な
 豫言者

希臘の聖人ソクラテスはかくして逝きぬ。年七十。基督は本名を耶蘇といふ。基督とは膏灌がれたる者といふ義にして教徒の奉りたる尊稱なり。猶太のベトレヘムに生る。西暦紀元第一年は實は其の生後四年に當るといふ。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。長じて三十歳の頃豫言者ヨハネの洗禮を受けて始めて傳道の生涯に入り、爾來三年の間猶太の各地を歴遊し、諸の迫害に屈せずして其の福音を傳へたり。當時羅馬帝國は榮華已に其の極に達し、禍亂の萌芽其の中に胚胎し、災異荐に至りて天下寧日なし。殊に基督の故國なる猶太は久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇の淫祠を崇拜して益、放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄びて空しく人を惑はすのみ。こゝに於

て、一世の人心は缺焉として、一大偉人の現出してこの暗黒の社會を照破せんことを渴望せり。基督はこの間に生れ、自ら救世の使命を負へる神の子なりと稱し、昂然として其の偉大なる新



教理を宣傳せしかば、遠近靡然としてこれに赴けり。僧侶學者官吏等これを喜ばず、猥に新法、異説を唱へて民を惑はすものなりとなし、基督を捕へて磔殺の刑に處す。基督豫め此の事あらんことを慮り、晏然として騒がず、靜かに祈りて曰く、「神よ、彼等を赦せ。彼等は其の爲すべき所を知らざればなり」と。其の刑場に赴くや、路傍に哀哭す

る女子を顧みて曰く、イエルサレムの女子よ、我が爲に哭くなかれ。唯己と己の子との爲に哭け」と。かくの如くして、基督は三十三年を一期として十字架上の露と消え去りぬ。基督歿した後、其の弟子等は激烈なる迫害に抵抗して其の教を天下に弘めぬ。基督教即ち是なり。

以上は四聖の略傳なり。其の人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべき所なり。而して、四聖の中釋迦を除きては、いづれも轆轤不遇の間に其の生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、其の經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテスと基督とはいづれも讒人の手に罹り、或は毒を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に釘殺せられたり。慘澹たりと謂ふべし。然れども是等の人々の志す所は天下後世にあり。現

世の禍福と一身の安危とは毫も其の顧慮する所にあらず。故に其の死に就くや、泰然として恰も歸するが如し。孔子は其の一身の不幸を憂へずして、却て「わが道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや」と嗟嘆せり。釋迦は衆生のために其の妻子と王位とを抛ちて食を路傍に乞へり。ソクラテスは死罪の脅迫に遇うて揚言して曰く、「正義を信ずるものに取りて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、其の一日即ち國民の迷を覺さざるべからず」と。基督は己を罪に陥るゝもののために神に祈りたり。嗚呼何ぞ其の慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖は其の生れたる處と時とを異にす。故に其の教理にも亦多少の差違なきを得ず。今其の大要を擧ぐれば左の如し。

涅槃

梵語ニルパナ
無爲
安樂
寂滅
不生不滅など
と譯す

身を修め
古之欲明明徳
於天下者先治
其國一欲治其
國者先齊其
家一欲齊其
家者先修其身
一欲修其身者
先正其心一欲
正其心者先
誠其意(大學)

釋迦の教理は煩惱を斷滅して涅槃に達するを主旨とす。夫人
生は苦に始りて苦に終る。生老病死、いづれか苦にあらざるべ
き。故に吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して苦の
原因は情慾にあり。情慾の原因は「我」の一念に執着するにあり。
故に吾人は「我」の一念を脱却して、無我無念の境界に達せざるべ
からず。是、人生究竟の樂地にして、涅槃即ち是なり。

孔子の教は身を修め、家を齊へ、天下を治むるにあり。而して身
を修むる基は孝にあり。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父
子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆之に基づく。人は生れな
がらにして、美德を天に稟くれども、後天の氣質によりてこれを
完うする能はざるもの多し。教育の要こゝに於てかあり。既
に教育を受けて身既に修らば、家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら

治るべく、國治らば、天下自ら太平なるを得べし。故に孔子の教
は一身の修養に始りて治國平天下に終るものと見るべし。

ソクラテスの教は所謂知徳合一説なり。謂へらく、眞正の知識
は即ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて
行はざると行うて知らざるとは、共に知識道德の眞正なるもの
にあらず。眞理を確信し、其の實行を以て最上の義務となせば、
正義自ら其の中にあり。正義は靈魂の満足なり。而して靈魂
は肉體と異にして不朽不滅なるものなり。故に吾人の正義を
行ふや、現世の利害は決して顧慮すべきにあらず。道德は富貴
のため存せず、然れども富貴は道德の中に在り」と。
基督の教は愛の教なりと稱せらる。所謂山上の垂訓は三年傳
道の極意を包括するを以て、左に其の大略を擧げん。曰く、心の

山上の垂訓
基督が猶太の祝
福の山で授けた
教訓
新約全書馬太傳
五・六・七に出
てゐる

貧しき者は福なるかな、天國は其の人の有なればなり、悲しむ者は福なるかな、其の人は慰めらるべければなり。飢ゑ渴く如く義を慕ふ者は福なるかな、其の人は飽くことを得べければなり。憐む者は福なるかな、其の人は憐を得べければなり。心の清き者は福なるかな、其の人は神を見るべければなり。惡に敵するなかれ。人若し汝の右の頬を打たば、左の頬をも轉らしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義を其の前に行ふなかれ。汝等施をするとき、右の手に爲す所を左の手に知らしむるなかれ。隠れたるを鹽み給ふ神はあらはに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふること能はず。人を是非するなかれ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ。然

らば與へられん。尋ねよ。然らば遇はん。門を叩け。然らば啓かれん。窄せまき門より入れ。沈淪はろみに至る路は濶く、其の門は大きく、これより入る者は多し。嗟呼、いかに生命に至る路は窄く、其の門は小さく、其の路を得る者の少なきぞや。凡そこの訓を聽きて行ふ者は、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざる者は、沙上に屋を架せる愚人の如し。と。基督教の精髓は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、實にこの山上の垂訓を基とせざるを得ず。

嗚呼、四聖逝いて既に幾千年ぞ。而してこの教の今なほ凜々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りて道念を養ひ、其の安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠なる救濟者なりと謂ふべし。其の遺徳の高大なること何を

以てこれに比せんや。(稗牛全集)

一五 光あれ

姉崎嘲風

姉崎嘲風
名は正治
哲學者
文學博士
東京帝國大學教
授
明治六年京都府
生

人間はあまり此の世界に慣れすぎた。何物も今ある如く昔から存し、萬事總べて成行のまゝになるものとして、敢へて怪しまず、その日その日を過す。兒童は世界新來の客として、驚異の目を見張つて事々に疑問を起し、何物に對しても起原或は聯絡の説明を求め、それが次第に世に慣れ、漸次に説明をつけて、終には疑をも起さず、好奇心をも動かさなくなる。然るに若し人あつて、俄かに此の世に生れ、しかも成熟した心を以て四圍の世界を視、人生の事を考へたならば、世界の一事一物、皆驚歎の種となり、疑問の材料となるに

違ない。

ユダヤ創世記
舊約全書の中に
ある

その疑問に對して、今日の科學はそれ／＼説明を與へはするが、さて萬事萬物の究竟起源となれば、無始無終といふより外はない。進化論で説明しても、其の至極の始は、終に混沌の闇に入らざるを得ない。こゝに於てか、我等の想像力は、大能の神靈が世界を創造する始といふことを想はしめる。ユダヤ創世記の開卷は此の想像を述べて曰く、
始に神天地を造り給へり。地は形なくして空しく、闇淵の面にあり。神の靈、水の面を覆ひたりき。

萬有混沌として、大地は一の闇の中に閉ぢられた。水とも雲ともわかぬ濛氣が全宇宙を籠めてゐた。そこへ、闇の中に、神「光あれ」と宣ひければ、光ありき。神は光と闇とを分ち給へ

り。夕あり、朝あり、これ首の日なり。
 嗚呼、此の一言ほど有力な、又不思議な言葉が他にあらうか。一言で常闇の天地に光明が生じ、未來億萬年に互るべき晝夜の區別が出来た。それから、神が「水あれ」といへば、水が出来て、天の大空と地の大海とが二つに別れた。又神が土といひ、青草といひ、鳥を呼び、獸を呼べば、一切萬物が其の聲に應じて生じた。かくして天地と萬物とが成立つたといふ。
 これは神話であり、想像である。従つて萬物成立の説明としては、我々の理性には合はない。併し理性的説明のみが唯一の解釋であるとはいへず、又宇宙の始のみが「光あれ」の言に發したとする必要もない。かくの如き創造の事實は、我々の生活に於て日々に經驗し得ることではなからうか。

人の心は物に牽かれ、事に動かされ、四圍と共に變じ、事情に隨つて推移して止る所を知らず、見るもの、聞くこと、一として全然自分で支配し得るといふものはない。其の上、思ふ事、欲するところも、變轉もすれば突發もする。由つて來る所を知らず、落着く先も、自分ながらに測り得ない。意馬は隠見し、心猿は跳梁する。若し自然に任せるならば、吾等の心は亂雜變轉の世界に彷徨する外なく、唯現在刹那の意識は明かでも、其の前後左右は混沌の大漠に没する外はない。然るに、そこに何か心を統御するに足る觀念が浮び、又は精神の底に透徹する靈感に接し、或は一生を支配すべき理想を體得すれば、混沌の闇は觀念理想の光明に破られ、精神の世界は靈の朝ぼらけに目がさめる。かくの如き精神の靈感は、聲こそなければ、實に「光あれ」の天籟にも比すべき創造

コスモス
Cosmos 調和した渾一
體

力を發揮して、今まで意馬心猿の跳梁に委した混沌は、光あり、力あり、一貫の命ある宇宙コスモスとなる。かく觀じ來れば、創世記の空想は單に世界萬物の始を説いたものでなく、刹那々々の我等が心にも起るべき大創造を描き、我等各個の心靈が發揮し得べき原造の事實を示したものと思はれる。

浮世の紛々たるに心亂れ氣濁つた時、我が心にかくすべしとの決斷を得たならば、それが世務の混沌を照す光ではないか。天地萬象を研究し、難題疑問の中に針路を失つて五里霧中に彷徨する際、一條の理路を發見し、快刀亂麻を斷つて眞理の光明に逢著するも、亦「光あれ」の不思議であるまいか。若しくは又、藝術家が天然人事の中に其の靈を捕へ得て、畫帖の上に、又は木石の中にこれを表現する時、「光あれ」の創造力を示すではないか。音樂

家が天來の音に心耳を澄ましてこれを樂譜に捕へるのも、詩人が靈感を歌ひ出すのも、亦「光あれ」の一聲、混沌の世界を破るに等しいものがあるであらう。

精神の創造力、これいつまでも正體の捕はれない不思議であるが、しかもまた實に人生に於ける高き、貴き、ゆかしき生命の源泉である。萬物の生々を貫きて生命あり、世事の紛々を超えて光明ある人生の眞味、人間の眞價値は、一に此の創造力の賜ではないか。特に信念生活の力は、紛擾多端、罪障重疊の人生に直入の一路を開き、智慧の光で無明の闇を破り、慈悲の暖かみに煩惱の氷を解かす。攝取の光明といひ、救の恩寵といふも、一に此の小我が宇宙の大神靈と感應道交して、混沌の中に「光あれ」の御言に接する經驗を指すに外ならぬ。

思へば、人生始つて以來、無常の世相を超えて常住の光明に浴し、破綻百出の人生に一貫の理想を發見し、五十年蜉蝣の此の世にも永遠の生命を實にし得た人にして、其の信仰開發の大事に際して、混沌の闇の中に「光あれ」の御言に接した思をなさなかつた者が果してあるであらうか。信念の力はこゝにある。人生の價値は實にかくの如き光明の新生命が齎すのである。「光あれ」これ單に太初の創世に限らぬ。人生美はしきものあり、眞理に順ふ生活あり、理想の力が現れる處には、「光あれ」の御言が常に聞え、其の不思議の創造力が絶えず躍動しつゝあるのである。

(光あれ)

一六 おのが物まなび

本居宣長

おのれいときなかりしほどより、書を読むことをなむ、よろづよりもおもしろく思ひて讀みける。さるは、はかくしく師につきて、わざと學問すともあらず、何と志すこともなく、そのすちと定めたる方もなくて、たゞ漢の日本のくさくさの書を、有るにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれと讀みけるほどに、十七八年なりしほどより歌詠ままほしく思ふ心いできて詠みはじめけるを、それはた師に従ひて學べるにもあらず、人に見することなどもせず、たゞひとりよみ出づるばかりなりき。集ども、古き近きこれかれと見て、かたの如く今の世の詠みざまなりき。

かくて二十餘りなりしほど、學問しにとて、京になむ上りける。さるは、十一の歳父に後れしにあはせて、江戸にありし家のなり

父
小津三四右衛門
定利
江戸にありし家
のなりはひ
江戸大傳馬町に
あつた木綿問屋
の業

百人一首の改觀抄

五卷 僧契沖の著

百人一首の註釋書

契沖

難波の圓珠庵の僧契沖阿闍梨

元祿十四年(二三六)寂

餘材抄

二十卷 古今集の註釋

勢語臆斷

五卷 伊勢物語の註釋

はひをさへに失ひたりしほどにて、母なりし人のおもむけにて、醫師のわざを習ひ、又そのために世の常の儒學をもせむとてな

りけり。さて京に在りしほどに、

百人一首の改觀抄を人に借りて

見て、始めて契沖といひし人の説

を知り、その世に勝れたるほどを

も知りて、この人の著したるもの

餘材抄、勢語臆斷などを始め、その

外も外も次々に求め出でて見け

るほどに、すべて歌學びのすぢのよきあしきけぢめをも、やうやうに辨へさとりつ。さるまゝに、今の世の歌よみの思へるむねは大方心になはず、その歌のさまもをかしからず覺えけれど、



契沖 京都市帝室博物館藏

そのかみ同じ心なる友はなかりければ、たゞ世の人なみにこゝかしこの會などにも出でまじらひつゝ、詠みありきけり。さて人の詠むふりはおのが心にはかなはざりけれども、おのがたてて詠むふりは今の世のふりにも背かねば、人は咎めずぞありける。そはさるべきことわりあり。別に言ひてむ。

さて後、國に歸りたりし頃、江戸より上れりし人の、近き頃出でてたりとて冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居の大人の御名をも始めて知りける。かくてその書はじめに一わたり見しには、さらに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠く怪しきやうに覺えて、さらに信ずる心はあらざりしかど、猶あるやうあるべしと思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれ／＼には、げにさもやと覺ゆるふし／＼も出て來ければ、又立ちかへり見るに、いよ

冠辭考

十卷

賀茂眞淵著

枕詞の解釋書

縣居の大人

賀茂眞淵

國學四大人の一

人

遠江國濱松在生

明和六年(二四九)

歿

年七十三

いよげにと覺ゆること多くなりて、見るたびに信ずる心の出て
來つゝ、遂に古ぶりのこゝろことばの、まことに然る事をさとり
ぬ。かくて後に思ひくらぶれば、かの契沖が萬葉の説とまじとはなほい



賀茂藤加 眞藤千 淵筆

まだしきことのみぞ多かりけ
る。おのが歌學びのありしや
う、大かたかくの如くなりき。
さて又道の學びは、まづはじめ
より神書といふすぢのもの、古
き近きこれやかれやと讀みつ
るを、はたちばかりのほどより
わきて志ありしかど、とりたててわざと學ぶことはなかりしに、
京に上りてはわざとも學ばむと志はすゝみぬるを、かの契沖が

田安の殿
田安中納言徳川
宗武
徳川吉宗の第三
子
明和八年(西三二)
薨
年五十七

名簿
中古貴人に謁見
し又は師家に入
門する時などそ
の證として我が
名を書きて奉る
もの

歌ぶみの説になずらへて皇國の古の意を思ふに、世に神道者と
いふものの説くおもむきは、みないたく違へりと早くさとりぬ
れば、師と頼むべき人もなかりしほどに、われいかで古のまこと
のむねを考へ出でむと思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考
を得てかへすゝ讀み味はふほどに、いよゝ志深くなりつゝ、
この大人を慕ふ心日にそへてせちなりしに、一年この大人、田安
の殿の仰せ事を承り給ひて、この伊勢の國より大和・山城などこ
こかしこと尋ね巡られしことの有りし折、この松坂の里にも二
日三日とゞまり給へりしを、さることつゆ知らで、後に聞きてい
みじく口惜しかりしを、かへるさまにも又一夜宿り給へるをう
かゞひ待ちていとゞ嬉しく、急ぎ宿りにまうでて、はじめて見
え奉りたりき。さて遂に名簿みづがを奉りて、教を承ることにはなり

たりきかし。(玉勝間)

一七 小品 二章

知足庵の記

村田春海

あはれ世のならはしこそはかなきものはあなれ。高き卑しき品いと異なりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、たゞ足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとは梢の嵐を恨み、月をめづるとては尾上の雲を厭ふためし、誰かはのがるべき。「林にやどるさゝぎは僅かなるさ枝の陰をのみ頼み、流に水求むる鼠はたゞ腹ふくるゝに過ぎず」とこそ古人もいひつれ。かゝることわりをだに分たば、限あるこの世に、限なき事を思ふべきかは。

村田春海
江戸の國學者
賀茂眞淵の門人
文化八年(西七一)
歿
年六十六

林にやどるさゝ
ぎ
鶴鶴巢クハドモニ深林、
不レ過キ一ニ枝、
鼠飲レ河、不レ過キ
滿腹一 (莊子)

梅尾の昔

鎌倉時代の初めに
禪僧榮西が宋
から茶の實を持
ち歸つたのを僧
高辨が分けても
らつて山城の梅
尾に植ゑた

中島廣足

熊本の國學者
長崎に住んだ
元治元年(西三四)
歿
年七十二

こゝに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱がのき、松のとぼそに心の月をすましめ、花を摘むゆふべ、鬨伽を汲むあかつき、み佛に仕ふる暇あるときは、氷を碎き、雪を煮て、梅尾の昔を忍ぶめるわざにしも心をなむ慰めける。これやこの世に求むべきすぢをも忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、おのが心から事足るわざにしもあれば、かの古人のいひけむことわりにこそかなはめ。いでや、うつそみの世のかぎりなき求めあるきはとは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなうべな、この住家をしも足ることを知るとは名づけしこと。(琴後集)

旅 泊

中島廣足

遠帆歸處
孤館宿時風帶雨
遠帆歸處水連雲。(唐の許渾)

「遠帆歸處水連雲」など打誦じ續くるに、今宵の泊りはかの見ゆる磯山のかげにやなどいふも、いつしかと心もとなきに、日さへ暮れぬれば、いと心細し。船人の習として、夜船漕ぐには、知るも知らぬも呼びかはしつゝ、をちこちかたみに力添ふめるもあはれなり。風や、吹きしきりて浪高く立ちくるに、そこはかとなく漂ふこゝちす。船人の「あまけなり」といふに、いましばしのほどをいかならむ」と心のみ碎かるゝも、楫の力には及ばねば、よしさはれ」とて、屋形のうちに頭さし入れて打臥しをり。夜中ばかりにやあらむ、辛うじて船つきぬ。御心休めたまへ」といふもいと嬉しきに、こゝもとにこそは」とて、錨おとし入れたる音の枕上に響きたるこそ又なく嬉しけれ。されど、なほ船のいみじうたゆたふは、なごり高くこそと思ふに、心地もあしけれど、かばかり

はとて、人々も寄りふしぬ。船人、あな苦しやとて、汗押拭ひつゝ、苦葺きわたし、粥打啜りなどして静まりぬ。雨降り出でて隙漏る雫もわびしきに、沖の方にいと遠く細き聲にあまたゝび呼ぶなるは後れし船にやと思ふに、いらふる人もなければ、船人を突き驚かすに、寐おびれたる聲して、たゞ一わたりうちいらへたるは、いかでか聞きしらむ」と覺束なきに、ずさして呼ばするも、例に違ひたるあやしき聲とや思ふらむ。辛うじて漕ぎいれて、危かりけり」といふゝ此の船のかたへに錨おろすも、げにいかばかりにか」と、くはしうも問ひ聞かまほしきに、こなたの船人、さこそありけめ。誰も同じかりけり」といとねぶたげにいひて、やがて軒おどろゝしうしたるも、情なくこそおぼゆれ。(樞園文集)

井原西鶴

江戸時代の小説家

大阪生

元禄六年(一六九一)

歿年五十二

水風呂

据風呂

一八 鼠の文づかひ

井原西鶴

毎年煤拂は極月十三日に定めて、旦那寺の笹竹を祝物とて、月の數十二本もらひて、煤を拂ひての跡を取り、葺屋根の押へ竹に使ひ、枝は箒に結はせて、塵も埃も捨てぬ、随分細かなる人ありける。過ぎし年は十三日に忙しく、大晦日に煤はきて、年に一度の水風呂を焚かれしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉までも段々に溜置き、湯の沸くにちがひはなしとて、細かなる事に氣をつけて、世の費穿鑿つひえせん人さくに過ぎて利發顔する男あり。同じ屋敷の裏に、隠居建てて母親の住まれしが、此の男うまれたる母なれば、其の吝きこと限なし。塗下駄片足なるを、水風呂の下へ焚く時、つくづく昔を思ひ出し、誠に此の木履は、我が十八の時、此の家に嫁入せし時、雜長持ざふながもちに入れて来て、それから雨にも雪にも履きて、齒のちびた

むかはり
満一年
一週忌



井原西鶴

るばかり、五十三年になりぬ。我が一代は一足にて埒を明けんと思ひしに、惜しや片足は野良犬めにくはへられ、端はしたになりて是非もなく、今日煙になすことよ。と四五度も繰言をいひて、其の後、釜の中へ投捨てられ、今一つ何やら物思ひの風情して、泪をはらくとこぼし、世に月日のたつは夢ぢや、明日はそのむかはりなるが、惜しい事をしましたと、しばし歎のやみ難し。折節近所の醫者水風呂に入られしが、先づ以て目出たき年の暮なれば、御なげきをやめさせたまへ。して、それは元日に何人の御死去なされた。と尋ねられしに、いかに愚痴なればとて、人の生死をこ

塚 今の大坂府堺市
吉方棚 歳徳神をまつる
神棚

仕懸山伏 詐欺をはたらく
山伏
土佐踊 土佐流の踊
放下師 鞆鼓やさくらな
どの囃子を用ひ
て歌舞する法師

れ程に歎く事はござらぬ。私の惜むは、去年の元日に、塚の妹が
禮に參つて、年玉銀一包くれしを、何程か嬉しく、吉方棚へ上げ置
きしに、その夜盗られました。そもや勝手知らぬ者の取る事で
はござらぬ。其の後色々の願を諸神に懸けましたれども、その
效もなし。又山伏に祈を頼みましたれば、此の銀七日の中に出
ますれば、壇の上なる御幣が搖ぎ、御燈が次第に消えますが、大願
の成就せし驗といひける。案の如く祈最中に御幣搖ぎ出て、燈
火微かになりて消えける。これは神佛の事、末世ならず有難き
御事と思ひ、御初穂百二十上げて、七日待てども此の銀は出ず。
さる人に語りければ、それは盗人に追といふものなり。今時仕
懸山伏とて、さまざま、護摩の壇に操いたし、白紙人形に土佐踊さ
すなど、此の前松田といふ放下師がしたる事なれども、皆人賢過

ぬ 近き事にはまり
手近く見易き事
に欺かれた
岩座 御幣を立てる臺
東方に西方に
東方に降三世明
王西方に大威徳
明王などいふ呪
文をとなへるこ
と

杉原紙 兵庫縣播磨國揖
保郡杉原から出
る紙
糊入の類

ぎて、結句近き事にはまりぬ。其の御幣の搖ぎ出るは、立ておき
たる岩座に壺ありて、其の中に鱒を生けおきける。數珠さらさ
らと押揉んで、東方に西方にと、獨鉗錫杖にて佛壇を荒けなく打
てば、鱒がこれに驚き、上を下へと騒ぎ、幣串に當れば、暫く搖ぎて、
知らぬ目からは恐し。又燈明は臺に砂時計をしかけ、油を拔取
ることぞ。と、此の物語を聞くから、愈、損の上の損を致した。我此
の年まで錢一文遺さず暮せしに、今年の大晦日は此の銀の見え
ぬ故、胸算用違ひて、心がかりの正月を致せば、萬づの事面白から
ず。と、世の外聞も構はず大聲揚げて泣かれければ、家内の者ども
興をさまし、我々疑はるゝ事の迷惑と、心々に諸神に祈誓を懸け
ける。大方煤も掃きしまひて、屋根裏まで檢めける時、棟木の間
より杉原紙の一包を探し出し、よくよく見れば、隠居の尋ねらる

近松門左衛門

元祿時代の犬戯

曲家

本名は杉森信盛

號は葉林子

享保九年(三六四)

歿

年七十二

五十三次

江戸から京へ東

海道五十三次

南無諸佛分身

今は骰子の目に

から●●●●まで

をします此の

頭はこの六字を

書いた

打出の濱

滋賀縣近江國大

津市の湖岸

矢橋

大津から矢橋へ

舟で湖水を渡す

瀬田長橋をとほ

ると遠まはり

姥が餅

同國栗太郡草津

町の名物

みなくち鱈

同國甲賀郡水口

町の名物

る年玉銀に紛れなし。「人の盗まぬ物は出まするぞ、さる程に悪い鼠め」といへば、お祖母中々合點せられず、これ程遠歩きする鼠を見た事なし、頭の黒い鼠の業、これからは油斷のならぬ事」と、疊たゝきて喚かれけり。(胸算用)

一九 馬追三吉

近松門左衛門

これく御覽ぜ、打たしやんせ。これこそ五十三次を居ながら歩むひざ、膝栗毛馬。はいしいだうちう雙六。「南無諸佛分身」と書いた六字を六角の骰子は櫻木花の都をまんなかに思ひくしのしるしを置いて、さらばこちから打出の濱。大津へ三里。ここで矢橋の舟賃が、出舟めせく、旅人の乗りおくれじとどさくさ津。御姫様よりまづ姥が餅。一口二口みなくち鱈踊りこえ、

坂

立神坂

同國甲賀郡土山

町から三重縣伊

勢國鈴鹿郡坂下

へ鈴鹿山脈をこ

す坂

關

同郡關町

鈴鹿關の所在地

龜山

同郡龜山町

石薬師

同郡石薬師村

吉田

今の愛知縣三河

國豊橋市

二川

愛知縣三河國渥

美郡大川町二川

豊橋の東南八軒

白須賀

靜岡縣遠江國濱

名郡白須賀町

新居

同郡新井町

もと關所があつ

た

坂へ越すのも骰子次第。骰子をふれく、ふるや鈴鹿を跡にさがれば、負けまいとせきに關より龜山に、煙草火打の石薬師。吉田・二川・白須賀ちよいと越えて、新居今切、舟に召せく、蛤召せのはまぐりはまぐり濱松まで舞坂三里な。のり掛川を飛びおりて、機嫌笑顔や、さあ日坂の蕨餅、腰なは何ぞ、日本一の大井川。仕合よしの旅雙六里、七里八里も唯一足に、先へくと咲きかゝりたる藤枝、岡部、瀬戸の染飯、うつの山邊の十團子、ところくの名物買うて、お錢つくくつく手鞠子に、ひいふうみいよ、府中江尻にすつとんく。とんと打つたる興津波、松原はる、膏薬買うて、月をすひ出せ清見寺。由井、蒲原や吉原のはなの蒲焼、名物の鰻の膚沼津の宿。三島越ゆれば箱根へ三里。骰子目次第に關越ゆる、悪い目打てば手判を取りに元の京へ立ちかへる。合

箱根 神奈川縣相模國 足柄郡箱根町
 小田原 同郡小田原町
 外郎 小田原の名物痰の薬
 元の禮部員外郎 陳宗敬が傳へたといふもの
 大磯 平塚 同國中郡の町
 藤澤 同國高座郡藤澤町
 とつか 神奈川縣相模國 鎌倉郡戸塚町
 程ヶ谷 今の横濱市保土ヶ谷區
 神奈川 今の横濱市神奈川區
 川崎 今の川崎市

褒美やる、其處に待ちやや。とさゞめきわたり、奥に御供し入りにけり。

馬方は遂に見ぬ金の間を、うそくと覗き廻れど、蓆の外踏みも習はぬ備後表、え、此の座敷は仰おほに滑つて歩かれぬ。大名の家よりもこつちの家が結構けつこでござる。と獨言してゐたりけり。

お乳の人は大高にお菓子様々ぶんからに盛入れ、どれく三吉其處にか。まあくそちはけな者ぢや。道中雙六お目にかけて、それ故に姫君様お江戸へござろと御意なさる。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子、有難う戴きや。お錢三筋買ひたい物買やや。ことにそちは通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に、逢はうといや。見れば見る程よい子ぢやに、馬方させる親の身は、よくくであらう。といと懇の詞の末、

品川 東京府武藏國荏原郡品川町
 大高 腰高と同じ
 菓子を盛る腰の高い器
 けな者 殊勝な者

杏掛 京都府山城國乙訓郡大枝村杏掛
 京都より丹波に通ずる老坂即ち大江山の東の宿馬子の縁でこの地を出した

三吉つくく、聞きすまし、由留木殿の御内、お乳の人滋野井様とはお前か。そんならおれが母様と抱きつけば、あゝこは慮外な。おのれが母様とは。馬子の子は持たぬ。ともぎはなせば武者ぶりつき、引きのくれば縋りつき、何の無い事申しませう。わしが親はお前の昔の連合、此の御家中にて番頭伊達の興作。其の子は私。此方様の腹から出た與之介はわしぢやはいの。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え。杏掛の姥が咄には、母様も離別とやらで殿様に御奉公、こなたを姥が養育し、父様に逢はせたら思へども甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人滋野井様と尋ねよ。と懇に教へて、姥はおれが五つの年、ひさしう痰を煩うて、擧句に鳥羽の祭にいて、餅が喉につまつて、つい死んでのけました。在所の

石部
滋賀縣近江國甲
賀郡石部町

衆が養ひて、やうく馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借ばしやくに奉公します。これ守袋を見さしやんせ。何のうそを申しませう。お前の子に紛はない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日たりとも三人一所にゐて下され。みごと杳も打ちます。此の草鞋もわしが作った。晝は馬を追うて、夜は杳打ち草鞋作り、父様母様養ひませう。父様と一つにゐて下され。拜みまする母様と取付き、抱付き、泣きゐたり。

お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我が子の與之介、守袋も覺えあり、飛附いて懷に抱き入れたく氣はせけども、あつあ大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、偽つて叱らうか。いや、かはいげに、さうも成るまい。まあちよつと抱きたい。あゝ、どうせうと、百千色の憂き涙、雙つの眼にはたまちかね、咽び沈んでゐたりしが、い

やいや、我が子ながらもさかしい者、偽つて眞まこととせず、母を心のきたない者と、さげしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙のごうて氣をしづめ、こゝへ來い、與之介と引寄せて兩手を取り、さても大きうなりやつたの。とても成人せうならば、侍らしう、なぜ尋常にも育たぬぞ。顔の道具、手足まで、母はかうは産み附けぬ。美しい黒髪を、このやうに剃り下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほんに氏より育ちぞと、さめく、と泣きけるが、これものを合點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でもない。あさましろ成りさがつたを嫌うていふでは更々ない。こゝの譯をよう聞きやや。母はもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓。殿様の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏者役、番頭、千三百石までお取立、追腹ほど

の御恩の家。其の間にそなたを設け、上には姫様御誕生。御内證のよしみにて、母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番と下座に下らぬ人。情なや父様が大事の所を仕損ひ、切腹にきはまつた。なれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出れば、いかがとて、母を其の儘残さう爲、父様の命助り、奉公構ひの御改易。其の時母も一緒にのけば、尤も夫婦の道は立つ。「お姫様の乳離れ、お苦みをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれ」と父様のことわりゆゑ、第一は男のため夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても、御勘氣の末、氣遣ひな。與作が子とばし言やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果

な生れ性、現在我が子に馬追させ、男の行方も知らぬ身が、母は衣裳を着飾つて、お乳の人よ、お局よと、玉の輿に乗つたとて、これが何になる事」と聲を忍びに泣くばかり。

子は生れつき賢くて聞分けあるほど猶泣入り、悲しい話を聞きました。さりながら常に姥が申したのは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし」といへば、ちやつと口おさへ、あゝ、勿體ない。



近松 門山 左米 衛太 門藏

蟻の穴
千丈之堤、ハ、テ以、テ蟻之穴、ヲ潰、ス
(韓非子)

其の乳兄弟言はぬこと。姫君様は關東へ養子嫁子にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體。三吉といふ馬追が乳兄弟にあるなどと、どう妨にならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。軽い様で重い事。ひそく、言うて人も聞く。まづ早う出てくれ。と泣く。いへば、あゝ、母様あんまり遠慮過ぎました。先づ言うて見て下され。「まだ言ひ居るか、聞分けない。夫の事、我が子の事、母に如才があるものか。合點の悪い、聞分けない。」と制するうちに、奥よりも、お乳の人はどこにぞ。御前から召します。と呼ばはれば、あれ聞きや。人が来る。出たも。と手を取つて引きいだす。不便や三吉しく、涙、頬冠して目を隠し、杳見まつべて腰に附け、見すぼらしげな後影、こりや、ま一度こちらむきや。山川で怪

我しやんな。雨風雪ふり、夜道には、腹が痛い、と作病おこし、二日も三日も休んで、煩はぬ様にしてたも。毒な物食はずに、腹や癩疹の用心しや。可愛のなりや、いたく、しや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎めぞ。と、式臺の段箱に身を投伏して歎きしが、懐中の有合ひ一步十三袱紗に包み、これ、たしなみに持つてゐや。と涙ながらに渡さるゝ。三吉見返り、恨めしげに、母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬおかまひ。其の一步もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の興作が總領ぢや。母様でもない他人に金貫はう筈がない。えゝ、胴慾な母様、覚えてゐさつしやれ。と、わつと泣出す其の有様。母は魂消え入りて、養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、なんのやらうぞ。奉公の身のあさましや。と、悶え焦れて歎きける。

坂は
小室節又は小諸
節といふ小唄

佐々醒雪

國文學者
文學博士
東京高等師範學
校教授
京都生

大正六年歿
年四十六

宗因

西山氏
大阪の俳人
天和二年(三三三)
歿
年七十八

時に奥口ざゝめいて、早御立ち」と姫君の御輿舁きあげ、行列立て、お乳の人の乗物を平附けにこそ舁寄せけれ。お乳はさあらぬ顔附して、姫君の御伽に最前の馬方を此の乗物に引附け、お慰みに謠はしや。「畏まつた」と、宰領ども、こりや、其處な自然生め、謠ひ居らう」とぎごつなく、やあ此奴はほえをるか。何ぢや、こりや忌々し」と握拳を二つ三つ戴きながら泣聲に、坂は照るく、鈴鹿は曇る、土山あひの、あひの土山雨がふる。ふる雨よりも親子の涙中にしぐるゝ雨やどり。(近松傑作全集―丹波興作)

二〇 西鶴と近松

佐々醒雪

井原西鶴は大阪の町人であつたと思はれる。若年から宗因の門に入つて俳諧を學んだが、當初はこれを以て門戸を張るとい

浮世草子

元祿ごろに行は
れた小説
當時の社會の有
様を寫したもの

談林

口合滑稽などを
主とした俳句
西山宗因に始る

筆蹟

入相のひびき
松の風淋しさ
も今ぞかし
ちるや櫻爰らに
茶屋があつた物
西鶴

ふ考もなかつたらう。恐らくは藝が身を助くる不仕合と察せられる。師翁宗因の歿したその年の冬に、始めて浮世草子を著して、西鶴は談林の點者から新生涯に入つた。

西鶴の草子は二十餘種。何れも簡短な小話を集めたもので、人間よりは事件或は社會の風俗を巨細に描くといふ方面に力を盡してゐる。そして後年の「永代藏」以下の者に至つては、西鶴の思想が更に變化して、稍、老成人の態度がある。勿論かの濶達な



井原西鶴筆蹟

風を失つてないが、なほ貨殖の道を説いたり、大晦日に狼狽する

様を嘲つたり、二日酔の頭痛を笑つたりする所は、さすがに五十近い老翁の酸いも甘いも知りぬいた異見といふ風が見える。その文章に至つては何人も企及し難い長所をもつてゐる。その簡潔で奇警なことは前後に比類がない。若し國文學史上に強ひて類似を求めらば、唯清少納言の枕草子がやゝ似てゐるであらうか。それすら西鶴ほどに警句に富んではゐない。これは勿論西鶴その人の天稟の才でもあるが、又俳諧から得た教養に負ふ所が多い。されば、西鶴の文は一種の俳文であると思つて差支がないと思ふ。

元來談林俳諧は警句を尙ぶものである。その警句を一分間に五句位づつ連發したものが、かの「大矢數」であつた。彼の文章に警句の多いことは、この教養の結果であらう。加之俳諧といふ

大矢數

延寶八年(三三〇)の夏西鶴が三日間に作つた四千句を採録したものの

小詩形の中に或思想を収めようとする爲には、自ら簡潔な敘法にも習熟すべきである。かくして學び來つた文章であるから、彼の文章には罅隙が多い。句と句との間に文法上の連鎖の十分な所が頗る多い。これは全く俳諧の續け方より來たものであらう。要するに、その文體も内容と共に俳諧に負ふ所ありとはいへ、かゝる創始の大手腕を示したことは極めて驚嘆すべきことである。

近松門左衛門、實名は杉森信盛といつて武門の出である。その生國については異説が多いが、長州萩の藩士で、同國深川に生れ、幼時を肥前唐津に送り、二十歳前後で京都に出たともいはれてゐる。また京都生れといふ説も強ちに否定することが出來ない。三十四歳の時、始めて竹本義太夫の爲に新淨瑠璃を作つて

竹本義太夫

義太夫節の元祖攝津天王寺の人正徳四年(三七四)歿年六十四

筆蹟

近松門左衛門、
姓者杉森、字者
信盛、平安堂巢
林子之像。
享保九年中冬上
旬
入寂。名阿禪院
穆矣日一具足居
士。
不_レ俟_ニ終焉期_一
豫自記。春秋七
十二歳

から、その作曲は百餘種に上り、近松の名は都會に喧傳された。初期の作は皆時代物で、四十八歳の時始めて世話物を作った。近松は時代物の方に多く苦心したもので、世話物は場當りの舊作が多かつた。が今日の眼から見れば、世話物の方が遙かに價値が高い。

近松の作
に於て注
意すべき
ことは、形

式からいへば、その文體が漸く散文を離れて律語的に進んだこと、及びその様式が敘事の脈を離れて漸く戯曲的體裁に變じたことである。更にその内容に就いて見れば、新淨瑠璃は在來の

筆蹟
享保九年冬上旬
入寂名阿禪院穆矣日一具足居士
不俟終焉期豫自記春秋七十二歳

近松門左衛門筆蹟

荒唐無稽なものよりは幾分か事實らしい脚色になつて、人間らしい人間が描き出されてゐる。これが近松の淨瑠璃の最も著しい長所である。但しそれは比較的に自然であるといふことであつて、決して全く不自然な脚色がなくなつたといふのではない。ことにその時代物と世話物との間には、その點に關して非常な懸隔がある。時代物に於ては、近松の作にでもやはり至善の人物と極悪人とが闘つてゐて、幾多の紛争の後に善人の勝利に歸するのである。その善人の甚だしく苦しめられる時には、往々不自然な超人間の勢力が出現して善人を救ふ。それでも見物が忠臣孝子の苦惱を見るに忍びないで、なし得べくば、自ら舞臺に躍り出でて、これを救ひたいといふほどにならせておいて、而して後神怪不思議な事件を點出してこれを救ふので

あるから、幼稚な見物はほつと息を吐いて安心する。その自然と不自然とを思ふに違がないといふのが近松の大いに歓迎された所以であらう。

世話物には當代の世相がさながら現れてゐる。蓋し近松は、當時の幼稚な見物人は古の英雄豪傑などといふものは恰も鬼神の如きものと想像してゐるといふことを知つて、超人間的の人物を時代物に描き出したが、世話物中に出づべき人物、即ち見物人が日常交渉してゐる張三李四の輩には、極悪人も至善人も皆境遇によつて支配される憐むべき人物であるといふことを見物もよく認識してゐるから、近松も亦常に執着や過失の多い憐むべき、か弱い人間としてこれを描き出した。そこで世話物には人間らしい人物が多いのである。世話物の主人公は、抑へ難

い感情に驅られて知らず識らず社會の常軌の外に逸出する、そこで社會の人と戦はねばならぬ。こゝに所謂世間の義理と人情との葛藤が起るのである。

近松の文章は實に巧緻なものである。その綿密な縁語や言懸け語の連続は必ずしも驚嘆すべきではなからうが、その道行の文句に敘景と抒情との巧に綯交ぜられてゐる所は確かに天下の逸品である。殊に最も感ずべきは、事件の發展に伴ふ文段の推移に巧な事で、主要な人物が登場すると共に、簡単な會話や地の文で、これより以前の頗る複雑な事件の大體が説明される。それより以後は、事件の發展と共に人々の關係や境地が明白になつて來て、見物人の爲に殊更に説明したやうな所が少しもない。その妙所は一々擧げることにも出來ぬが、殆ど神工といふべ

きてあらう。(近世國文學史)

互理章三郎

倫理學者

東京高等師範學

校教授

明治六年丹波國

篠山生

二一 永遠の生命

互理章三郎

個人の生命には限がある。永遠を求め無窮にあこがれても、限られた生命は如何ともし難い。生きた者の惱はそこに發生するのである。かの佛教や耶蘇教で、次の世に天國とか、極樂とか、乃至淨土とかいふやうな世界を假定し、そこに永遠の生命があるとして、衆生を導き且勵まさうとするのも、畢竟この生きた者の惱をいやさんがためである。然るに、我が日本精神は、その永遠の生命をさういふ無何有郷に求めないで、現實なる日本の國そのものに見出す。我等日本民族は、この國を愛することによつてこの國に永遠に生きようとする。この吾人の身體は數十

年を待たずして死んでも、この國を愛する一念によつて、この國に永遠の生命を創造する。

若林寛齋
名は進居
京都の儒者
享保八年(三六三)
歿
年四十五

我等は、代々我等の祖先の魂がこの國と共に永遠に生き、永遠にこの國を護つてゐると信じて來た。江戸中期の學者若林寛齋は、大和魂の立志といふことを述べて、よくその點を明かにした。即ち彼は、志を立てるのはこの五尺の身體の生きてゐる間だけではない。この身體は假令衰へても、斃れても、天つ神より下し賜はる御玉―靈魂をどこまでも忠孝の御玉と守り立て、天つ神に復命して、八百萬の神の下座に列り、國家を鎮める靈神となるに至るまで、ずんと立て通すことである。といつてゐる。これは畢竟我が日本の國民は、誰でも、赤誠を以て國の爲に力を盡すならば、その清らかな精神は神そのものとなつて、永遠の生命を續

藤田東湖
名は彪
水戸藩士
勤王家
安政二年(一五五)
歿
年五十

けることが出来るといふことを道破したものである。維新前にあたつて若き日本の士氣を鼓舞作興した藤田東湖、あの東湖の有名な回天詩の一節に、苟も大義を明かにして人心を正しうせば、皇道奚ぞ興起せざるを憂へん。斯の心奮發して神明に誓ふ。古人言へるあり、斃れて後已むといふのがある。これは、苟も大義名分を明かにして、曲つてゐる人間の心を正しうしたならば、皇道が何で興起せぬことがあらう。自分は發奮一番、神明に誓つて人心を正すつもりである。息の根の通ふかぎり、飽くまでこの事に當るつもりである。それで遂に斃れたら、古人のいふ通り萬事休むのだといふ雄々しい志を述べたものである。

然るにその翌年に出來た彼の正氣の歌は、劈頭日本の地理を詠

四維
禮義廉恥
烈公
徳川齊昭
水戸第九代の藩
主
萬延元年(一五〇)
薨
年六十一

んで、粹然として神州に鍾る正氣即ち大和魂が如何に立派な國史を作り來つたかを稱へ、次いで永遠に死なぬ日本精神の活動に言及し、乃ち知る、人亡ぶと雖も、英靈未だ嘗て泯びず、長へに天地の間に在りて、隱然として彝倫を敍するを」と續けて、忠臣、義士の精神力は決して肉體と共に亡びるものでないことを説き、末尾に至つて、自分の覺悟を述べて、生きては當に君冤を雪ぐべく、復四維を張るを見ん。死しては忠義の鬼となり、極天皇基を護らん」といつてゐる。これは、自分の生きてゐる間は、主君烈公の冤を雪いで、道徳を此の世に明かにしよう。が、死んだら、忠義の靈魂となつて、天地の有らんかぎり永遠に皇基を護り奉らう」といふのである。

前年の回天詩では、生きてゐる中はやるが、死んだが最後、萬事休

斃れて後已む
俛焉日有華
華斃而後已
(禮記)

筆蹟

三決死矣而不
死二十五回
渡刀水五
閑地不
三十九年七處
徙邦家隆替非
偶然人生得失
豈徒爾自驚塵
垢盈皮膚猶餘
忠義填骨髓
姚定遠不可
期丘明馬遷空
自念苟明大
義正人心皇
道矣思不與
起斯心奮發誓
神明古人云斃
而後已

むのだといつたが、此の詩では、生きてゐる中は勿論、死後と雖も活動は休止せぬといふ考に進んだのである。

元來、斃れて後已むといふ言葉は、支那の禮記といふ書物にある。
三決死矣而不死二十五回渡刀水五閑地不
三十九年七處徙邦家隆替非偶然人生得失
豈徒爾自驚塵垢盈皮膚猶餘忠義填骨髓
姚定遠不可期丘明馬遷空自念苟明大
義正人心皇道矣思不與起斯心奮發誓
神明古人云斃而後已

回天の詩 藤田東湖筆

幼少から此の書を精神の糧としてゐた彼は、多分その感化を受けて、それを箴言としたのであらう。然るに、その後、段々我が國史の精神に深く立入つて、幾多忠臣義士の研究を進めた結果、斃

れて後已むなどいふところで止つてゐられず、こゝに天地のあらんかぎり皇基を護るといふ日本精神の體現者となつたのである。

吉田松陰
名は矩方
長州藩士
勤王家
安政六年(三五九)
刑死
年二十九

吉田松陰もまたさうであつた。かの有名な士規七則には、死して後已むの四字、言簡にして義廣し。堅忍果決、確乎として抜くべからざる者は、これを舍きて術なきなり」とある。彼はかやうに、死して後已むといふことを以て男兒が覺悟を定める唯一無二の方法だと考へてゐた。然るにその翌年になると、楠公七生の説を作つて、楠公兄弟はたゞ七度どころではない、千たび萬づたび生れかはつて、永遠に死なない」といひ、こゝに明かに日本精神の永遠の生命に悟入した。かくて、彼は、その絶筆たる留魂録に、雄々しくも、

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも

とゞめおかましましやまとだましひ

と詠じてゐる。東湖松陰の兩英傑が支那精神の粹から一轉して日本精神の粹を自覺するに至つたといふことは、いかにも意

身はたとひ武藏の野邊に

とゞめおかましまし

やまとだましひ大和魂

吉田松陰筆蹟

義深いことといふべきである。この兩英傑の覺悟・自覺こそ、實に日本精神が皇國に永遠の生命を見出すといふ最もよい例證である。かやうに此の皇國を愛し、此の皇國に永遠の生命を創造してこそ、我々はほんたうの日本人になり得たといふことが出来るのである (國民道德)

高須芳次郎

號は梅溪
文學者
明治十三年大阪
生

二二 光は日本より

高須芳次郎

現代の思想界は今や一大轉換期に入つた。言換へれば、日本が自ら進んで、世界に於ける思想界の大混亂を整理し、統一しなければならぬ秋となつた。この意味から「光は東方より」といふ言葉に對して、「光は日本より」と言ひたい。

明治初年以來、日本の識者は歐・米の唯物文明・機械文明を取入れることに全力を盡すが、日本を進歩せしめる最善の方法だと考へた。いかにも當時にあつては、唯物文明・機械文明の壓力が強くて、それをはねのけてゆくには、どうしても急速に機械文明・唯物文明を輸入しなければならぬといふ、せつばつまつた情態にあつたのである。この意味で、先覺者の取つた道は決して標

的を外れてはゐなかつたが、今日の如く、文明上、日本が何等歐米に劣らない情態に達してみると、今更、歐米の機械文明、唯物文明の跡を追ふことのみ満足してはをられない。時代は既に變つた。

惰性といふはおそろしいものだ。條約改正のために、一種の方便として伊藤、井上諸公が唱へた歐化主義は、極端なところまで進展して、歐米盲拜に陥つてしまつた。即ち方便として用ひた歐米主義が、今度は主要目的となつて、日本を進歩せしめる唯一の方法は悉く歐化にありとするに至つたのだ。例へば衣食住の如きも、洋食、洋服、洋館を尊重し、あらゆる雜貨類は「舶來」を絶對權威とするに至つた。一時は英語を國語とせよといふ説が起り、それと前後して、日本人種改良論さへ唱へられた。

伊藤
公爵伊藤博文
井上
侯爵井上馨

三宅雪嶺
名は雄二郎
哲學者
文學博士
萬延元年(一八六〇)
加賀國金澤生

その弊風を嘆いて、三宅雪嶺氏等は國粹主義を唱へ、極端な歐化を抑制しようとしたが、それは或部分に影響を與へたに止り、大部分は滔々として歐化の途を足早に急いだ。その結果、法律といへば獨法に非ざれば英法、英法に非ざれば佛法といふ工合で、たゞ外國の法律を研究する事を法律學の神髓を得る所以であるといふ心得、日本古來の法制はこれを眼中に置かぬ。獨り法律ばかりでなく、經濟に於ても、西洋の經濟學を以てその全部なりとし、日本の經濟學は顧みる者が少ない。更に哲學も、文學も、宗教も、東洋・日本に立派なものがあるに關らず、これを研究する學徒は割合に少ない。そして哲學といへば、獨逸を本場の如く考へ、文學といへば、佛蘭西を本家の如く考へ、宗教といへば、西洋神學を唯一のものと考へるが如き誤謬に陥つてしまつた。獨り學

問のみならず、小説や戯曲も、思想上、表現上、西洋の模倣をこれ事として、遂に西洋人をして、現代の日本文學は日本独自のものではない、西洋そつくりである。西洋の模倣追隨に過ぎぬ」と言はしむるに至つた。

私が興味深く感ずるのは、最近英國に於ける自由人が支那の老子哲學に共鳴して、現代の英國に於ける人爲的文明の虚偽を排し、老子の理想とする自然主義的質朴さを保つた原始文明の情態に還元せんことを切に望んでゐることだ。例へば陸地を旅行する場合に、汽車、自動車などの便によらないで徒歩し、旅中宿泊する場合に、普通のホテルに身を置かないでテント生活をするといふ工合に、どこまでも人爲を離れ、自然を尊ぶことを最大原則としてゐる。かういふ傾向は、カーペンターの哲學にも現

老子
李耳
字は聃
支那周代の哲學者

カーペンター
Carpenter
(1780—1840)
英國の牧師
哲學者

シンプル、ライフ
Simple-life

れてゐるが、今日進んだ英人はシンプル、ライフこそ眞の文明生活である」と考へるに至つたのである。

これは歐洲の先覺者が現代文明の弊に堪へないで、改革の第一聲をあげた例である。現在の歐洲文明は爛熟の極に達して、政治的にも、社會的にも、經濟的にも全く行詰り、宗教や文藝も亦萎靡して振はないといふ有様だ。それらの病毒を悉く取除いて、新鮮な活力ある情態へ歐洲を導かねばならないといふのが歐洲先覺者衷心の願である。要するに、在來「光は西洋より」と信ぜられたのが、今やそれを期待することが不可能となり、光は東洋より」と叫ばねばならぬやうになつた。もう一層適切に言へば、「光は日本より」と叫ばねばならぬやうになつた。

ハーモニー
Harmony

今日、西洋學を尊重する人々は、日本には何等の思想もない、哲學もない、文化もないといふ風に速斷する。日本には果して独自の思想がないか、独自の哲學がないか、將又独自の文化がないか。さういふわかりきつたやうな問題についてさへ、今日は一應、所見を述べなければならぬ情態に立到つてゐる。

一體東洋文化の基調と西洋文化の基調とは自ら異なつてゐる。茲に東洋といふのは主として日本、支那等をさす。さういふ東洋の國では調和ハーモニーの美を尊ぶ。その主因は凡て文化の要素を宇宙觀から想ひついてゐるのであつて、宇宙の森羅萬象は肉眼で見たとくころ、上下あり、高低あり、大小あり、種々變化錯綜してゐるが、根本的に見ると、調和に歸するのである。自然界では、地震の如き、大暴風雨の如き、驟雨の如き動的争闘情態を呈する場合も

ダイヤモンド
Diamond
金剛石

あるが、それらの破壊作用は、その目的とするところ、やはり調和にある。調和のための争闘であり、調和のための動搖である。

結局、宇宙の真相はどこまでも調和に存するとする。それ故、支那では天といふことを西洋のゴッド以上に崇敬するのだ。静夜、蒼茫たる天を仰げば、星辰が燦爛としてダイヤモンドを鏤めた如く輝き、白日、空を望めば、光の女神たる太陽が麗しい光線を八方に射かけてゐる。それと共に風雨寒暑の差別も生じて、四季が推移してゆく。それらは凡て天の作用で、天の上に大いなる調和が現れてゐるといふ意味に於て天を崇敬するのが東洋人の常習だ。「則、天去私」といふことは、東洋獨得の精神であり、東洋哲學の一大基調をなすものである。この點に於て、日本も支那もほぼ同一で、即ち文化の基調は共に調和の上にある。調和

は統一的、綜合的、歸納的で、かの分析を主とする西洋文明とは根本的に色合を異にする。西洋に於ては凡ての事體を分析してその極微に至らねばやまない。例へば、國家に對する場合、西洋では、これを分析して個人に至るのであるが、日本や支那では、個人から國家に歸着するといふ風に、綜合的な態度をとる。かういふ點が東洋文明の西洋文明に異なる所以である。既に調和を以て特長とする日本思想は、現代の西洋の如く唯物に偏せず、又印度の如く唯心に偏せず、物・心を統合して圓融自在なる境地を目ざしてゐる。従つて日本哲學の一つの特長は唯心のみを強調せず、又唯物のみを力説せず、この二つの長所を綜合した中正の道、即ち圓融自在なる超越的境地にある。言換へると、唯物に即するが如くにして唯物を超越し、唯心に即するが

如くにして唯心を超越し、唯物唯心の二境を超えて、更に一段高い根本原理即ち「まこと」といふ物・心一如の境地を支配するところに立つ。それを平たく言へば、天に則ると言ふことが出來よう。即ち一切の私を去つて公平無私の天の道につくといふことが、東洋人の心であり、同時に日本人の心である。日本哲學の源流はかういふところに一つの根を据ゑてゐる。

然らば、さういふ思想を組織づけ、體系づけた哲學が日本にあるかどうか。日本人は西洋人のやうに、分析に得意でない、又、組織體系に長けてゐない。従つて古來、日本人の間には今日西洋流にいふ哲學なるものは、或は無いかも知れぬ。それ故、近世日本の國學者は日本を「言舉せぬ國」と言つた。「言舉せぬ」とは、つまり、

言説上、組織・體系をもたぬといふことである。或は空理・空論せず、道の實行を主とするといふ意味にもとれよう。由來日本人は、道徳上、言ふことよりも、先づ行ふことを尙び、自ら哲學・宗教を組織するよりも、他の哲學・宗教の長所を採入れ、それを調和の形に於て現すといふ上に世界無類の能力を發現し來つた。現在に於てもやはり、さういふ統化力を十分に持つてゐる。故に支那に於て發達した儒教は、今日では全く衰へたが、獨りその精神は日本に遺つてゐる。嘗にその精神のみならず、形式及び文獻の類も悉く日本に保存せられてゐる。佛教は元來印度に發生し、支那を経て日本に傳はつたが、それも今日は印度・支那に衰へ、獨り日本にその精神を留めてゐる。否、精神のみならず、形式及び文獻をも保存してゐる。更に基督教は歐米から日本

ム
プラグマティズム

Pragmatism
實行主義
實踐主義

陸象山

名は九淵

宋代の儒者

王陽明

名は守仁

宋代の儒者

へ傳へられたが、或意味に於て、基督の精神は寧ろ日本に存してゐると言つてもよいかと思ふ。宗教のことばかりでなく、世界各國の文化は悉く海を越えて極東の島國なる日本に集中し、最後に日本の力に依つて把持せられ、整理せられるのが常だ。何故かといふに、日本人が調和といふことを重んじて、あらゆる文化を調和・鹽梅し、それを日本化して一層光彩あらしめるべき無比の能力を有するからである。

殊に實行の上に長じてゐることは、日本の著しい特色で、この意味に於てプラグマティズムの色彩を帯びてゐると言つてよい。否、プラグマティズムは日本から發現したと言つて差支ない。支那に於ては道徳・倫理の學が發達し、最後に陸象山・王陽明の徒に至つて更に新しい光を放つた。それら道學の隆盛は支那文

明に非常に光彩を放つた。が支那は道德上の實行を忘れて禮儀三百の形式美を事とし、言説徒らに盛て、道は却て衰へた。支那古代の哲學は、その要素として調和を尙んだが、支那人は却て實生活に於て、それを破壊するが如き行動に出た。従つて支那を起原とする儒教の精神は却て日本に於て實現せられ、或はこれを武士道の上に活用し、或は佛教の精神と調和せしめる試も生れた。つまり儒教は日本で始めてその處を得たのである。それは單なる一例に過ぎぬが、要するに、外來の文化を悉く攝取してこれを日本化してゆく調和力は、古來長く日本に於て保持されて來たのである。

更に日本哲學の源流として第二に擧げなければならぬ一要素は、自然の人情を重んずることである。今日の言葉で言へば、之

を情意と稱すべきであらうか。人情の發現は、所謂國學者の「眞心」に根を置いてゐると思ふ。即ち感情の上で少しも偽ることなく、又少しも矯めることなく、自然のままに眞情を流露する。人に對するときは、その相手に眞情を傾ける、動物に對するときは、動物に眞情を注ぐ。天地自然に對しても亦情の眞實を盡すといふのが特色である。これが一步進むと、天真爛漫の境地に達し、丁度櫻の花がばつと咲いてばつと散るやうな自然の趣と一如になつた心境に入る。それらの傾向は、古事記に於ても、萬葉集に於ても、或は源氏物語に於ても十分に現れてゐるのである。つて、本居宣長はそれを「ものあはれ」と言つた。「ものあはれ」を知ることは人情の極致である。「ものあはれ」には理窟がない、分析解剖がない。具體的綜合的である、また直覺的直感的である。

ある。平家物語が今日も尙我々の心を深く打つ所以は、人情の機微が能く現れてゐるからである。即ちもののはれが平家物語の中心をなしてゐるのだ。ところが、西洋人は人情よりもより多く理性を尙び、その極、何事も理窟を以て解決しなければやまぬ。理窟に加ふるに理窟を以てする。それは西洋人の一大長所であると共に、一大短所である。彼等が實驗を重んじ、實證を尙び、何事をも分析解剖しなければやまぬのは、以上の如き傾向に根ざしてゐるのである。

極言すれば、西洋の考方はとかく調和を破壊する方に傾き易く、動もすれば理窟に捉はれ過ぎる爲の非人情になる。非人情の結果は、個人的となり、勢利己主義に流れ易い。この傾向は上下を一貫し、何事も權利・義務で解決しようとすることになる。そ

のため、調和を破ることが益はげしく、結局、孟子の所謂「上下交、利を征して國危し」といふ状態となる。

現代日本人の多くは、以上の如き大缺陷が西洋文化に附隨してゐることに氣づかず、日本自身の特色たる調和の哲學を忘れて、却て調和を破る西洋の文化に隨喜し、極端から極端に走る西洋の學説を何等の批判無く受容れる弊に墮してゐる。若し日本人が祖先以來、調和の精神を以て外來文化を統制し、外來思想を巧みに支配した世界無比の消化力あることを自覺するならば、日本の立脚地から外來思想の上に嚴正な批判を下して、取るべきは取り、捨つべきは捨てねばならぬ。「吾人は日本人なり」といふ思想の上に獨立不羈の精神を持つことが何より必要である。この一點を忘れるならば、勢、思想上に於ける、二大錯誤に陥

るを免れぬ。

諸君、今日の時勢を何と観るか。今や行きづまれる西洋文明は何等かの解決を得なければならぬ。久しい間文明的優越を誇つた歐洲は、今や自己の作りあげた文明に自ら縛られて、どうにも身動きが出来ないのである。かくの如き有様に對して、更に來るべき新文明の曉の鐘をつき鳴らし、東の空にほのく、と創造的文明の太陽を仰ぐべき道を切開くのは、日本を除いて他に何國があるか。日本こそは東洋文明のあらゆる長所を助長し、且保有してゐる。支那・印度を禮讚するものはその古代文化を稱揚するけれど、それらは今日、皆日本の力で生命を持續してゐるのだ。即ち日本あつての東洋で、東洋あつての日本ではない。日本人の優越な同化力に依つて、東洋文明の命脈が維持されて

エポック
新紀元
EPOCH
新時期

中村孝也

史學家
文學博士
東京帝國大學史料編纂官兼助教
明治十八年群馬縣生

來たのであると共に、今や多年閑却された東洋文明の上に新しい再評價が加へられんとしつゝあるのだ。即ち東洋文明の新清算を始める時代に入つてゐるのだ。

要するに、現代は、日本が多年に互る西洋崇拜乃至歐化主義の病弊を一掃し、正しい日本の自覺の下に新文明を創造してゆくべき時代になつたのである。即ち世界史上新しいエポックを劃する日本時代が正に來たのである。(光は日本より)

二三 神勅は輝く

中村孝也

歴史は長し、されど國は永へに若やかかなり。
仰ぎ見る神武の大帝
建國創業よりこゝに二千五百九十有餘年、

人は去り、世はうつろひ、
世紀は幾たびかめぐりゆきつ、
寄せては返す榮枯の浪に洗はれて、
群がり起れる英雄の追憶
夢の如く淡く消えゆけども、
潑刺たる日本民族の精神は
時を重ねて益、その光彩を發揮す。
見よ、悠久無限のあなたに
燦として輝く神祖の御姿。
聽け、朗々たる無韻の大御言葉、
大宇宙の靈氣を浪だたせ來るを。
「豊葦原の千五百秋の瑞穂國は、

これわが子孫の王たるべき地なり。
爾皇孫就きて治らせ。さきくませ。
寶祚の隆えまさんこと、
當に天壤のむた窮みなかるべし。
壯なるかな。天軍一齊に歡呼の聲を擧げて
廣大無邊なる神徳を讚美す。
いかに偉大なる宣言よ。
いかに雄渾なる斷定よ。
天日の遍く照したまふところ、
自由と愛と光明と希望と、
生々發達の悦、全世界に漲る。
その高尚なる道德性に照されて、

我が民族の使命は夙に指示せられき。
 起てよ、全人類進歩の先頭にあつて
 平和の使者たること、即ちこれ
 我等の存在を聖ならしむるものに非ずして何ぞや。
 汪洋たる東洋文化の潮流と
 澎湃たる西洋文化の潮流とは、
 今や相寄り相融合して
 渾然たる世界文化の大潮流をなしつゝあり。
 此の新なる生活を指導するものは果して誰。
 東海國あり。永への青年。名は日本！
 建國以來二千五百九十有餘年の歴史を有して、
 連綿たる皇統を戴ける國民の若々しさ。

新時代の喇叭を高らかに吹奏しつゝ、
 平和と愛と悦との花瓣を撒き散らすところ、
 神勅は輝く。(歴史と趣味)

二四 勅語

朕皇祖皇宗ノ威靈ニ頼リ萬世一系ノ皇位ヲ繼承シ帝國統
 治ノ大權ヲ總攬シ以テ踐祚ノ式ヲ行ヘリ舊章ニ率由シ先
 徳ヲ聿修シ祖宗ノ遺緒ヲ墜ス無カラシムコトヲ庶幾フ
 惟フニ皇祖考叡聖文武ノ資ヲ以テ天業ヲ恢弘シ内文教ヲ
 敷キ外武功ヲ耀カシ千載不磨ノ憲章ヲ頒チ萬邦無比ノ國
 體ヲ鞏クセリ皇考夙ニ心ヲ養正ニ宅キ迺チ志ヲ繼明ニ尙
 クス不幸中道ニシテ聖體ノ不豫ナル朕儲貳ヲ以テ大政ヲ

勅語
 今上天皇陛下が
 昭和元年十二月
 二十八日御踐祚
 後朝見の御儀に
 於て賜うた勅語

攝ス遽ニ登遐ニ遭ヒテ哀痛極リ罔シ但皇位ハ一日モ之ヲ
曠クスヘカラス萬機ハ一日モ之ヲ廢スヘカラス哀ヲ銜ミ
痛ヲ懷キ以テ大統ヲ嗣ケリ朕ノ寡薄ナル唯兢兢業トシテ負
荷ノ重キニ任ヘサラシコトヲ之レ懼ル

輓近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趣舍相異ナル
アリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家
ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國本ニ不拔ニ
培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコト
ヲ懋ムヘシ

今ヤ世局ハ正ニ會通ノ運ニ際シ人文ハ恰モ更張ノ期ニ膺
ル則チ我國ノ國是ハ日ニ進ムニ在リ日ニ新ニスルニ在リ
而シテ博ク中外ノ史ニ徵シ審ニ得失ノ迹ニ鑒ミ進ムヤ其

ノ序ニ循ヒ新ニスルヤ其ノ中ヲ執ル是レ深ク心ヲ用フヘ
キ所ナリ

夫レ浮華ヲ斥ケ質實ヲ尙ヒ模擬ヲ戒メ創造ヲ勗メ日進以
テ會通ノ運ニ乘シ日新以テ更張ノ期ヲ啓キ人心惟レ同シ
ク民風惟レ和シ汎ク一視同仁ノ化ヲ宣ヘ永ク四海同胞ノ
誼ヲ敦クセンコト是レ朕カ軫念最モ切ナル所ニシテ丕顯
ナル皇祖考ノ遺訓ヲ明徵ニシ丕承ナル皇考ノ遺志ヲ繼述
スル所以ノモノ實ニ此ニ存ス有司其レ克ク朕カ意ヲ體シ
皇祖考暨ヒ皇考ニ效セシ所ヲ以テ朕カ躬ヲ匡弼シ朕カ事
ヲ獎順シ億兆臣民ト俱ニ天壤無窮ノ寶祚ヲ扶翼セヨ

(官報)

